公立大学法人　滋賀県立大学

スチューデントファーム

「近江楽座」

まち・むら・くらしふれあい工舎

2009年度　活動報告書

近江楽座＝学生らしさを活かして地域に学び、育ち、貢献できる場　をめざしています

はじめに

地域と学生が紡ぎだす、ゆるやかなつながりを求めて

近江楽座がスタートして、６年目を無事終えることができた。授業でもない、ゼミの活動でもない、この全くと言っていいほど学生の自主性にまかせた活動がこうして継続し、そして大学に、地域に根付きを見せいていることは、全国的に捉えてみると奇跡の星のように輝く一つの成果だと言っていいだろう。

平成22年度の活動は、学生主体の地域活動を行うＡプロジェクトが24件、自治体や企業等から提示された課題について自治体等と協働で取り組むＢプロジェクトが１件、合計25ものプロジェクトが展開し、テーマや地域との関わりも非常にバラエティに富むものとなった。すべてのプロジェクトのうち、今年度より活動を始める新規プロジェクトが10件あり、取り組みは成熟しながらも新しい風が吹き込まれる、全体に厚みを感じる１年でもあった。

今年度は、活動の充実を図る試みとして年度半ばに「まちづくりファーマーズディスカッション」、年度末に「まちづくりファーマーズフェスタ」を開催した。これは、近江楽座で活動するプロジェクトの活動を全チームで共有して、互いに高めあうことに加えて、全国的に活躍する講師をお招きして学生のスキルアップと活動の展開を図るイベントとして企画された。それとともに、いつもお世話になっている地域の方を含む、まちづくりに興味のある方に広く参加してもらい、様々な立場で「まちづくり」を一緒に考えるという、大学発信の場づくりを目指したものでもあった。

「まちづくりファーマーズフェスタ」にゲストとしてお招きした梅原真さんには、地域にある素材の魅力を表現し、価値を高めていく手法を講演いただいた。梅原さんは地域の価値創造という点ではたくさんの成功事例を持つ草分け的な存在である。その講演を読み解くと、ないものねだり、ではなく、あるものみがきの視点を持つことで、地域はもっと豊かになる、そんなメッセージがふんだんに盛りこまれていたように思う。地域にあるすばらしい芽に気づき、その価値を多くの人に伝え、育て、花を咲かせ、咲いた花を結実させるイメージで考えてみると、すべてを行うことは難しいにせよ、学生が主役になれる場面がきっとあるだろうと思う。そしてこれまで近江楽座の活動フィールドとなった多くの地域で、大きなこころで学生を受け入れ、育んでいただいた実績を考えると、その土壌がもう整いはじめているように感じる。

一方で、卒業するとその場を離れることが多い学生の特性上、その取り組みは一朝一夕ではいかないものである。また、近江楽座の学生の立場でも、プロジェクトの継続に際しては、引き継ぎという点で大きな岐路に立つものも少なくない。

しかし、そういった局面こそ、学生ならではの視点や若さを活かして、ともに汗をかき、地域の方とともに乗り越えてほしいと思う。その協働作業を積み重ねることで地域と大学がゆるやかにつながり、気負わずとも継続できる新たな価値が生まれるのではないだろうか。

近江楽座がその牽引役として走り続けることをこれからも大いに期待したい。

平成22年６月
近江楽座専門委員会 委員長
印南比呂志
（人間文化学部生活デザイン学科）

目次

はじめに 3
目次 4
1 近江楽座の取り組み概要 5
1-1　近江楽座について 6
1-1-1　近江楽座とは 6
1-1-2　プロジェクト区分 6
1-2　プロジェクトの採択について 8
1-2-1　応募件数及び採択件数 8
1-2-2　プロジェクト募集 8
1-2-3　プロジェクト審査 8
2 活動報告 11
2-1　各プロジェクトの活動実績報告 11
2-2　共通プログラムの報告 62
2-2-1　中間報告 62
2-2-2　成果報告会 64
2-2-3　ステップアッププログラム 66
2-2-4　情報発信 67
2-3　学生委員会 68
2-3-1　学生委員会とは 68
2-3-2　委員会の活動 68
3 今後へ向けて 71
おわりによせて 72
4 付録 81
4-1 プログラム推進メンバー 82
4-2 メディア掲載 83

1 近江楽座の取り組み概要

1-1　近江楽座について

1-1-1　近江楽座とは

滋賀県立大学の“スチューデントファーム「近江楽座」ーまち・むら・くらしふれあい工舎”は、2004年度の文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）に採択された教育プログラムです。

本学は、開学以来、「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する」を理念に滋賀という地域との関わりを重視しており、地域を対象とする演習、フィールドワーク、研究活動等が活発に行われてきました。こうした実績を土台にしながら、「近江楽座」では、学生が主体となって地域活性化に貢献する活動を行うプロジェクトを学内公募し、選定するとともに、選ばれたプロジェクトに対しては、活動費の助成、専門家のアドバイスなど様々な支援が受けられる仕組みになっています。

■ 活動助成システム
“スチューデントファーム「近江楽座」”として選定したプロジェクトの事業計画に基づいて、活動に必要な事業費を審査し、助成します。

■ コンサルティングシステム
教員の指導、助言に加えて、行政や専門家の紹介など、学生の地域貢献プロジェクトを進めていくために必要なコンサルティングを行います。

■ 地域「知」のリソースシステム
大学と地域連携に係る情報を他大学、研究機関、行政、NPO団体などと共有化し、活用するためのデータベースを構築し、活動をサポートします。

学生が地域へ出て行って活動することで、社会の仕組みに対する正しい理解、地域に根ざした問題発見の能力、課題解決への行動力、合意形成をはじめとする人とのコミュニケーション能力などを向上させる教育面での効果があります。

また、大学の持つ知的資源や学生のパワーを生かしながら、大学と地域の連携を深めることで、地域活性化に貢献する大学としての役割も果たしています。

現代GPとしての取組を終えた、2007年度からは、大学独自の取組としてより一層パワーアップした活動が展開できるよう充実を図っています。また、同年度より、「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動を行う従来の取組を継承した「Aプロジェクト」に加え、新たに、自治体や企業等から提示された課題について、学生主体のプロジェクトチームを結成して活動する「Bプロジェクト」の取組が始まっています。

1-1-2　プロジェクト区分

▼Aプロジェクトとは
「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動を募集します。昨年度までの継続活動を対象とした①「継続プロジェクト」、新規活動を対象とした②「新規プロジェクト」、近江楽座や学内の他のプロジェクト間の連携を高める③「協働プロジェクト」という三つの区分で、さらに①「継続プロジェクト」は、(1) ベーシックプログラムと (2) ステップアッププログラムの二つの枠組みを設けています。

▼Bプロジェクトとは
自治体や企業、団体等から依頼のあった課題について、「近江楽座」として取り組むテーマを設定し、学生主体のプロジェクトチームを募集します。テーマに対する提案を求め、選定されたチームと指導教員、地域づくり教育研究センター、依頼先とが共同で企画を練り、地域協働でプロジェクトに取り組みます。

3つのサポートシステム

活動助成システム

選定したプロジェクトの事業計画に基づき、活動に必要な事業費を審査し、助成します。

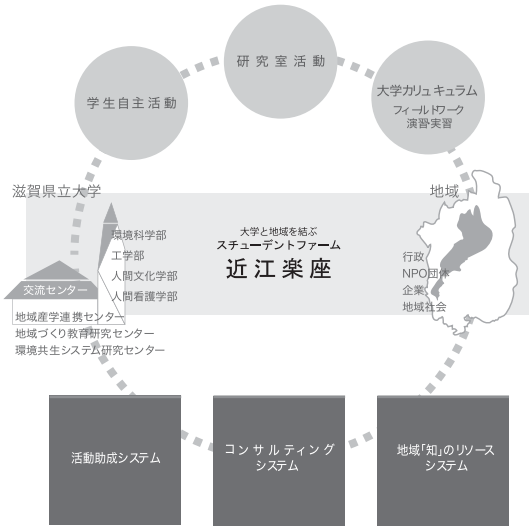
地域「知」のリソースシステム

他大学、研究機関、行政、NPO団体等と共有化・活用するためのデータベースを構築し、活動をサポートします。

コンサルティングシステム

教員の指導・助言に加え、行政や専門家の紹介等、プロジェクト進行に必要なコンサルティングを行います。

サポートシステム概念図



1

2

「近江楽座」の３つサポートシステム（1）とその概念図（2）

1-2　プロジェクトの採択について

1-2-1　応募件数及び採択件数

応募件数

■ A プロジェクト

29 チーム

うち、昨年度より継続：14 件（うちベーシックプログラム 6 件、ステップアッププログラム 8 件）

新規：15 件（うち協働 1 件）

■ B プロジェクト

1 チーム

滋賀の魅力を再発見し、移住や交流居住を促す PR 雑誌の企画・制作（滋賀県自治振興課）

採択件数

■ A プロジェクト

24 チーム

うち、昨年度より継続：14 件、新規：10 件（うち協働 1 件）

■ B プロジェクト

1 チーム

1-2-2　プロジェクト募集

プロジェクト募集期間

■Aプロジェクト

日時：平成 21 年 4 月 10 日（金）～5 月 11 日（月）

■ B プロジェクト

日時:平成 21 年 7 月 17 日（金）～ 7 月 27 日（月）

募集説明会

■Aプロジェクト

日時：平成 21 年 4 月 23 日（木）

場所：滋賀県立大学 交流センター 研修室 1-3

■Bプロジェクト

日時：平成 21 年 7 月 22 日（水）

場所：滋賀県立大学 交流センター 研修室 4

1-2-3　プロジェクト審査

プロジェクト審査

■ A プロジェクト（公開プレゼンテーション・審査会）

・日時：平成 21 年 6 月 14 日（日）

（※新型インフルエンザの影響で、当初予定していた 5 月 23 日（土）を延期）

・場所：滋賀県立大学 交流センター研修室 1-3

・内容：プレゼンテーション（プレゼンテーションシートによるプロジェクト説明）及び質疑応答、審査（非公開）

・選定委員（敬称略）：

滋賀県立大学理事（教育担当）　大田啓一

滋賀県立大学人間文化学部教授　面矢慎介

滋賀県立大学環境科学部講師　　錦澤滋雄

滋賀県広報課　小林由季

マキノまちづくりネットワークセンター　藤原久代

財団法人滋賀県産業支援プラザ　西岡孝幸

■ B プロジェクト（プレゼンテーション及び審査会）

・日時：平成 21 年 7 月 30 日（木）

・場所：滋賀県立大学 交流センター 研修室 4

・内容：プレゼンテーション（面接形式）及び質疑応答、審査（非公開）

・選定委員：

滋賀県立大学理事（地域貢献・渉外担当）仁連孝昭

滋賀県総務部自治振興課　清水安治

滋賀県立大学人間文化学部准教授　森川稔

滋賀県立大学地域づくり教育研究センター　近藤紀章

採択および採択通知

■ A プロジェクト

・日時：平成 21 年 6 月 18 日（木）

・内容：近江楽座ホームページ及び学生ホール掲示板にて通知

■ B プロジェクト

・日時：平成 21 年 8 月 10 日（月）

・内容：近江楽座ホームページ及び学生ホール掲示板にて通知

プロジェクト説明会

■ A プロジェクト

・日時：平成 21 年 6 月 24 日（木）

・場所：滋賀県立大学研修室 1-3

・内容：採択プロジェクト代表者に対する、事業計画、会計処理等の進め方に関する説明会

公開プレゼンテーションの様子

2 活動報告

2-1　各プロジェクトの活動実績報告

01. 守山宿だるまそばプロジェクト　12
02.　エコキャンパスプロジェクト木楽部会　14
03. 市民および医療に携わる人々とのふれあいを通して志向する未来看護塾　16
04. 限界集落の村おこし　18
05. 灯りんちゅ～リサイクルキャンドルでスローな夜を～　20
06. Let's　複合　22
07. 七曲り仏壇職人にまつわる絵本作成プロジェクト　24
08. とよさらだプロジェクト　26
09. 信・楽・人 -field gallery project-　28
10. とよさと快蔵プロジェクト　30
11. 一姓（いっしょう）～農業を県大にツナげて元気にする！～　32
12. 菜の花エネルギー　34
13. Living design 13th FASHION SHOW　36
14. 石山アートプロジェクト　38
15. ART FORUM 2009 DIG'S　- 近江八幡を掘り出せ！ -　40
16. 発信基地 in 朽木の森　42
17. ケンダイ地球座　44
18. キネ・コモン　石寺　46
19. Ohmi Food Project　48
20. 近江楽座を全国区へ　50
21. 近江中山道百彩プロジェクト　52
22. Taga-Town-Project　54
23. いかして民家？　56
24. 自然環境伝播計画　58
25. おうみの豊かな暮らしかた広報プロジェクト（B プロジェクト）　60

01 守山宿だるまそば プロジェクト

チーム名	守山宿だるまそばプロジェクト
代表者	嶋田菜穂子
代表者所属	人間文化学研究科
メンバー数	15 人 （うち学生コアメンバー３人）
指導担当教員	山根周
活動場所	守山市中心市街地
関係団体	守山宿だるまそばの会
活動概要	守山の町家の特徴である、町家の裏の畑地に注目し、1. 中心市街地の畑マップ作成、2. 使われていない畑でそばを栽培、3. 収穫したそばを活用するという活動を通じて、守山市を PR していきます。

チームからの活動報告

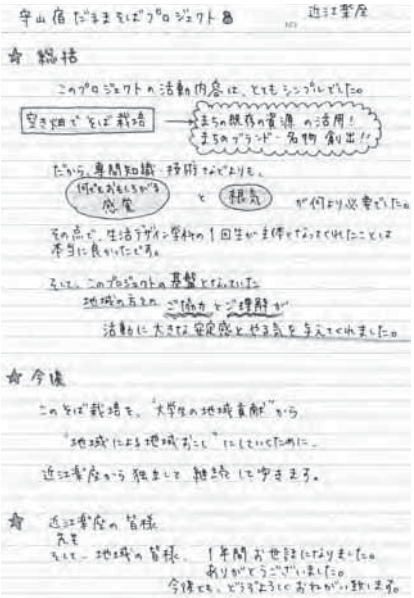
成果 - できたこと -

中心市街地の畑地調査、畑地の耕起、種まき、栽培、収穫ともに、学生と地域の人が一つになって作業できたことが、本当によかった。また、当初心配していた収量も、今年度の全国平均を上回るものであった。そばの栽培とともに、地域の方に向けたニューズレターを発行できたことは、このプロジェクトについて広く情報発信する上で効果があった。その上、手書きという「味」が地域の人に好感をもってもらえて、反響が良かった。

課題 - できなかったこと -

せっかく収穫できた蕎麦だが、地域の方々に食べていただける機会を年度内にもてなかった。ポン菓子や、蕎麦茶にして配るなど、ご協力いただいた方がたには年度内に食べていただきたかった。

活動を振り返って


守山宿だるまそばプロジェクト　近江農産

☆ 総括

このプロジェクトの活動内容は、とてもシンプルでした。

空き畑でそば栽培 → まちの豊富な資源の活用！ まちのブランド・名物 創出!!

だから、専門知識・技術などよりも、

何でもおもしろがる感覚 と 根気 が何より必要でした。

その点で、生活デザイン学科の1回生が主体となってくれたことは本当に良かったと思う。

そして、このプロジェクトの基盤となっていた

地域の方々の ご協力 と ご理解 が

活動に大きな安心感とやる気を与えてくれました。

☆ 今後

このそば栽培を、"大学生の地域貢献"から

"地域による地域おこし"にしていくために、

近江農産から独立して継続して学ぶ。

☆ 近江農産の皆様

大きな、そして、地域の皆様、1年間お世話になりました。

ありがとうございました。

今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	①耕起方法、畝立て、種まき、栽培、収穫、乾燥、脱穀と、普段は出来ない経験を、知識を、本プロジェクトを通じて得ることができた。 また、栽培過程での地域の方からのアドバイスが、非常にありがたかった。
②交渉力・コミュニケーション能力		
③計画力・スケジュール管理能力	✓	③栽培という自然相手の活動だったので、天候などを常に意識して次の活動日などを計画していた。幸い、報われた。
④企画・プロデュース力		
⑤問題解決力		
⑥地域の方との人的ネットワーク		
⑦学内での新たな出会い・交流	✓	⑦博士後期過程の学生と、1 回生というチーム構成は、地域の中だけでなく学内の多世代交流を実現したと思う。
⑧その他		

成果物／制作物

楽座新聞

ニューズレター

総括

指導教員から　人間文化学部　山根周

本年度新規のプロジェクトとして発足した「守山宿だるまそばプロジェクト」は，中山道の宿場として栄えた守山宿の歴史（絵図に残るそばの図）を掘り起こすところから始まり，現在あまり活用されなくなったまちの資源（住居裏に残る畑地）を活用することで，宿場としてのソフト面における歴史性の再生と現代のまちの活性化を同時に図る，意欲的な取り組みでした。

代表の嶋田さんは，守山在住で，これまでもまちづくりに積極的に参画してきたこともあり，地域住民の方々との幅広いネットワークがすでにあり，それらの方々とのコンセンサスを十分に取り，うまく下地をつくった上でのプロジェクトであり，スムースに展開したと思います。

まちに残る畑地の調査，畑の準備，種まき，栽培，収穫，そば粉の製粉，といった一連のプロセスは，地域住民の方や，１回生の学生も参加し，次年度以降もプロジェクトは順調に継続していきそうです。そして次年度以降は，楽座のサポートがなくても，地元のエネルギーと予算を主体としてプロジェクトが継続していく予定です。楽座のプロジェクトが初動エネルギーとして十分に役割を果たし，迅速に自立的なプロジェクトとして地域が担っていくことになり，楽座のサポートが効果的にプロジェクトに貢献する形になったと思います。

楽座のプロジェクトが多くある中で，地域自身の要望をうまく吸い上げる形でプロジェクトを計画したことが，いい形で次のステップへとつながっていったのだと思います。

地域主体として継続していくプロジェクトの，今後のさらなる展開を期待したいと思います。

近江楽座活動年度　H16　H17　H18　H19　H20

01

02 エコキャンパス プロジェクト木楽部会

チーム名　エコキャンパスプロジェクト木楽部会
代表者　一浦皓治郎
代表者所属　環境科学部
メンバー数　16 人 （うち学生コアメンバー７人）
指導担当教員　松岡拓公雄
活動場所　滋賀県立大学内「もくれん」
関係団体　大滝山林組合
活動概要　今年で６年目になる木楽部会は「木楽ブランド」、「木工教室・ワークショップ」の２つを活動の軸として、木工作業所「もくれん」を学生と地域が「ものづくり」でつながる場にしていきます。

チームからの活動報告

成果 - できたこと -

かも小屋、ベンチ、看板、棚など様々な依頼をこなせた。依頼制作から商品化へ向けてのモデルとなる制作ができた。土壁ワークショップでモクレンの内装が少し進んだ。

課題 - できなかったこと -

ワークショップが少なすぎた。
人手が少なかったため依頼された制作も納品が遅れてしまった。

活動を振り返って

申請時に掲げていた目標としての活動はあまり達成できなかった。このような結果になってしまった主な原因としては、世代的に今年度は２回生以下のみで活動をしたため、経験不足と管理能力の欠如によるスケジュールの遅れ、頼まれた依頼を断れずに引き受け続けてしまったこと、などがあげられる。今後としては、依頼を受ける手順や、役割分担の確立など課題は山積である。しかし、この局面を乗り越えるために、今までの地域の方とのつながりを保ち、巻き込むような活動をしていきたい。

具体的には、様々な地域産業との連携したワークショップを開きたいと考えている。現時点で既に来年度の依頼も舞い込み、期待されているという喜びとともに、来年度の活動も責任を持ってやり遂げなければならないというプレッシャーを感じている。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	①様々な制作を通して、基本的な木工道具の使用方法について学ぶことができた。広告を作るなど、広報の活動を通してパソコンの技術が身に付いた。
②交渉力・コミュニケーション能力		
③計画力・スケジュール管理能力		
④企画・プロデュース力		
⑤問題解決力		
⑥地域の方との人的ネットワーク		
⑦学内での新たな出会い・交流		
⑧その他		

成果物／制作物

楽座新聞

総括

指導教員から　環境科学部　松岡拓公雄

　このところ低炭素社会づくりに向けて、ますます「木」が見直されている。
その「木」と人間は切っても切れない関係であることを設立当初から訴えながらキャンパス生活に「木」を取り入れることを実践し続けていることは、絶やさないでほしい。初代のメンバーが制作した各所のサインも古びてきた一方、味わいも出てきている。大学にとけ込んでいる。

　今年度はキャンパス内のかもを他の不動物から夜間守ってやるためにかも部のリクエストを受け「かも小屋」を制作した。はじめて空間を制作したことになる。また大学周辺のカフェや公園のサインやベンチ制作など地域への活動も続けているが範囲を広げる進展が必要だと思う。それはもっと木の活用を進める子供達へのワークショップの開催や、森林組合との協働など、これまでもひととおり手をつけてきたのだが、次年度はよりこの部会の立ち位置を明快にして、活動拠点モクレンを生かした展開を期待している。

03 市民および医療に携わる人々とのふれあいを通して志向する 未来看護塾

チーム名 未来看護塾
代表者 桧枝祐貴
代表者所属 人間看護学部
メンバー数 59 人 （うち学生コアメンバー 10 人）
指導担当教員 伊丹君和、山田博子
活動場所 彦根市内
関係団体 彦根市立病院、NPO 法人ぽぽハウス
活動概要 地域に飛び込み、地域の人々や医療現場で働く人たちと交流します。ボランティア活動を通して私たちが学ぶことによって、地域にある様々なニーズを捉え、「未来の看護のあり方」を模索していきます。

チームからの活動報告

成果 - できたこと -

以前からお世話になっている彦根市立病院・小児病棟では以前と変わらず毎月、何度か活動することができた。緩和ケア病棟では授業と活動時間がうまく合わず回数的には少ないが、夏期休暇など積極的に参加することができた。また毎年恒例のクリスマス会も患者さんとその家族さんにも喜んでもらえる内容であったと思う。今年度から新たに活動し始めた城南小学校学童保育では予定より少し活動時期が遅くなったが積極的に参加でき地域の方との交流を深めることができた。

課題 - できなかったこと -

NPO 法人ぽぽハウスさんからお声をかけていただいた行事は多くのメンバーが積極的に参加できたが、平日の普段の活動への参加が少なかった。ぽぽハウスさんがどのような活動をされているのかということを把握できていないメンバーがいたことが原因であると考える。メンバー全体が情報を共有できるようしなければならない。

活動を振り返って

今年度は 1 回生がたくさん入ってくれたので活動場所を広げようと考え、こちらから活動のお願いに行き、後期から城南小学校学童保育での活動を始めた。活動を始めて半年近くになったが今では顔や名前を覚えてくれるまでになった。また湖風祭でのちびっ子広場や彦根市立病院でのクリスマス会など、昨年度とは違うものを提供するなど新たな試みに挑戦することできた 1 年となった。

今年度の活動をふまえて、当初予定していた看護学生らしい活動として手洗い講習を次の代では行えたらと思う。小学校では昨年、流行した新型インフルエンザにより学級閉鎖となるクラスもあった。その予防策として手洗いがとても効果的である。学童保育で活動をさせていただくことで小学生を対象にした手洗い教室を行う一歩となったと思う。また野瀬町子ども会さんの活動に参加させていただき、活動の場が増えたこと、そして地域の方との交流が増えたことをとてもうれしく思う。今後も一緒に活動を一緒にさていただく中で、地域の方の健康とニーズに沿った活動を行っていきたい。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術		②彦根市立病院の小児病棟や緩和ケア病棟、NPO ぽぽハウス、城南小学校での活動で様々な年齢層の人々と触れ合って、コミュニケーション能力を高めることができた。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	
③計画力・スケジュール管理能力		
④企画・プロデュース力	✓	④去年の反応や反省を生かして新たな企画を考え出すことができた。
⑤問題解決力		
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	⑥活動場所を増やすことでより地域の人との交流が増えた。
⑦学内での新たな出会い・交流		
⑧その他		

成果物／制作物

ちびっこ広場 連日の大盛況！

新聞にも載っちゃいました

楽座新聞

総括

指導教員から　人間看護学部　伊丹君和

「未来看護塾」の活動は、学生の自ら学ぶ力を育てるとともに、人との関わりや看護への興味・関心を深めるものであり、教育的な効果も大きいと考えています。また学生間の縦と横のつながりの関係性はもちろん、地域の方々との関係性など自ずとコミュニケーション力の向上にもつながります。また悩み、試行錯誤を重ねる体験の中で、豊かな感性をも育んでいます。地域での活動の場も広げており、地域が「未来看護塾」に求めるニーズも高まっています。このことは「未来看護塾」の地道で継続的な活動の成果だと思っています。

今後ますますこの活動が発展し地域の方々がより元気に生き生きと生活できるよう、引き続き支援していきます。

04 限界集落の村おこし！

チーム名 男鬼楽座
代表者 前田早紀
代表者所属 人間文化学部
メンバー数 21 人 （うち学生コアメンバー 16 人）
指導担当教員 濱崎一志　石川慎治
活動場所 彦根市内、滋賀県内
関係団体 -
活動概要 私たちは自然環境や地域文化財の基礎的調査と、茅葺き屋根の葺き替えを行うことで民家の保存活動を行ってきました。さらに、今年度は他大学の学生と交流をし、新たな活動へと結びつける年とします。

チームからの活動報告

活動を振り返って

今年度は、他団体とのネットワークの強化に力を入れた。９月には京都府宮津市で行われた「大学生地域再生活動団体サミット」に参加した。丹後村おこし開発チーム（立命館大学）に声をかけていただき、参加することができた。サミットには、全国から 10 団体が参加し、私たちのように古民家再生をテーマにした団体だけでなく、農業から地域活性化を考える団体もあり、他団体の活動内容や、メンバーの方々の考えを聞くのは参考にもなり、大変興味深かった。サミットを機に、この 10 団体で JSARC（大学生地域再生活動団体連盟）を結成し、連絡を取りやすい体制を作った。

また、サミットでは活動報告会の他、討論会も行われた。この討論会に参加したことで、自分たちの活動を客観的に見つめなおすことができた。男鬼楽座の活動の意味、最終目標、今後の展開等が、明確になっていないことが分かり、メンバーで話し合う必要があると感じた。

後期から始まった定期ミーティングでは、主に茅刈りの計画を立てた。縄や鎌の準備、茅刈りの場所、下見の日程確認を行い、計画的に準備を進めることができた。ミーティングにおいて、今年度は茅を 150 束刈るという目標を立て、多賀町桃原・保月、伊吹山で茅刈りを行い、175 束刈ることができ、目標を達成することができた。今後は、今年度に広げることが出来たネットワークを大切にし、他団体との交流を続ける中で、自分達の技術や知識の向上につなげていきたい。

また男鬼楽座にとって、地域住民の方々との交流が今後の課題で、来年度はさらなるアプローチをかけ私達の活動に興味を持っていただけるように努めたい。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	①葺き替えイベント開催に備え、事前に茅葺き勉強会を行った。イベント当日には茅葺き職人の方に、男結びや茅葺き民家と自然の共存についての講習をしていただいた。葺き替えで使う技術や知識を学び、実践で役立てることができた。
②交渉力・コミュニケーション能力		
③計画力・スケジュール管理能力	✓	③今年度は、丹後村おこし開発チームの呼びかけで、大学生地域再生活動団体サミットに参加した。事前ミーティングも数回行い、９月開催のサミットに向けて、数か月前から計画的に準備を進めることができた。
④企画・プロデュース力		
⑤問題解決力		
⑥地域の方との人的ネットワーク		⑧今年度は、大学生地域再生活動団体サミット、21 世紀の景観とまちづくり in 京都、全国茅葺き民家保存活用ネットワーク協議会第１０回シンポジウム に参加し、他団体とのネットワークを広げることができた。大学生地域再生活動団体サミットの参加 10 団体で、JSARC(大学生地域再生活動団体連盟) を結成し、連絡を取り合える環境を作った。
⑦学内での新たな出会い・交流		
⑧その他	✓	

成果物／制作物

目標を上回る茅を確保！
～来年度の葺き替えに向けて

はじめて出会う活動のあれこれに感動！

2009年度後期の活動内容
11月10日 勉研ぎなど、茅刈りへの準備
11月20,21日 茅葺きシンポジウムに参加
11月中旬～12月上旬 茅刈りイベントを開催
12月12,13日 かみいしづ古民家再生プロジェクトの茅刈り・葺き替えイベントに参加
12月15日 伊吹山で刈った茅を小屋に保管
1月9日 古民家再生と共に舞台大学の学生シンポジウムに参加

楽座新聞

男鬼通信
NO.7 2009 秋
近江楽座

大学生地域再生活動団体サミットに参加しました！

サミット 2日目

ニューズレター

総括

指導教員から　人間文化学部　濱崎一志

今年度の活動の特徴は学外の他団体との連携強化を計ったことにある。大学生地域再生活動団体サミットでの他大学との協力は、その後の立命館大学や武庫川女子大との「結」的な連携として結実した。例年同様の茅刈り、屋根の葺き替えも順調に進めることができた。次年度の展開が大いに期待できる。

05 灯りんちゅ
～リサイクルキャンドルでスローな夜を～

チーム名 あかりんちゅ
代表者 本間友香里
代表者所属 環境科学部
メンバー数 11 人 （うち学生コアメンバー７人）
指導担当教員 近藤隆二郎
活動場所 彦根市内、滋賀県内
関係団体 ひこねキャンドルナイト実行委員会
活動概要 廃棄ロウソクやいらなくなった口紅・クレヨンで作ったリサイクルキャンドルを利用したイベントを開催したり、キャンドル作り教室を開くことで環境について考えるきっかけをつくっていきます。

チームからの活動報告

活動を振り返って

この一年間の振り返りとしては第一に、あかりんちゅと携わった方々に感謝したいと思います。あかりんちゅの活動を通して、普段の生活では決して関われない方との交流が出来たことをとても嬉しく思います。今年度の評価すべき点は、キャンドルナイトとキャンドル教室を計画通りに行うことができたことです。夏湖風祭でのキャンドルナイトでは、雨の影響に加え、計画の不備や宣伝不足という点で課題が残りました。その教訓を生かし、秋湖風祭、冬至ではスムーズにキャンドルナイトを実行することができました。キャンドル教室では、彦根市の子供会を中心に依頼を受け、全５回行うことができました。既にキャンドル教室を行った子供会の方からは、今後も是非やってほしいという依頼も多くいただいているので、続けていきたいと思います。また活動の後半ではキャンドルの販売を展開することができました。初めての試みでしたがまずまずの売れ行きにメンバーもやりがいを感じることができました。また金銭のシビアな面を通し、団体活動の責任感を感じることができたと思います。今後の課題としては商品としてのクオリティをもっとあげること、季節やイベントと関連づけなくてもコンスタントに需要されるような価格設定をすることです。今年度では他の活動が忙しく、家庭へのキャンドル配布を行うことができませんでした。地域に向けて商品の販売範囲拡大、私たちの活動目的、メッセージを広めていくことも今後の目標です。

最後に、課題としてはあかりんちゅのプロジェクトの意義をもっと正しく認識してもらうことです。あかりんちゅは最初に聞いたときのインパクトは十分にあると思います。しかし、それが一人歩きしてしまい、第三者から見ると単にキャンドルを作り、キャンドルナイトを推進しているプロジェクトとして認識されてしまいがちのようです。「簡単に捨てるのではなく、工夫して資源を有効に使う意識」を地域の方に、キャンドルという手段を使って伝えていくということが私たちの一番の目的なのです。廃棄されるはずだったローソクを再利用して活動しているということを広報やキャンドルナイトによって、より強調して、今後の活動に反映させていきたいと思います。

スキルアップ - 新たに得たこと -（一部抜粋）

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	キャンドル作りの技術や知識を得ることができた。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	キャンドル教室で子供たちと楽しくコミュニケーションを図ることができた。
③計画力・スケジュール管理能力	✓	キャンドル教室等を通じて、イベントがスムーズに流れるように段取りができた。
④企画・プロデュース力	✓	キャンドル販売にあたり、ターゲットの絞り込みや、ポップの作成、セット売り、バラ売りなどの販売技術やプロデュース力を身につけることができた。
⑤問題解決力	✓	定期的に話し合いの時間をとり、問題解決策を出し合うように心がけれるようになった。
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	地域のイベントに参加し、企業の方とのネットワークを築くことができた。
⑦学内での新たな出会い・交流	✓	ぞろぞろ会の主催やイベントの協働を通じて、つながりを広げ、深めることができた。

成果物／制作物

スローな夜を演出
あかりんちゅ
キャンドルナイト
at県大

一年の課題と成果

次の課題

一年の成果

後期の活動報告

3月25日

あかりんちゅキャンドル大人気

ちょっと聞いてよ！
あかりんちゅの自慢

地元の方からの声

楽座新聞

キャンドルナイトチラシ

てづくりキャンドル

総括

指導教員から　環境科学部　近藤隆二郎

まずは、チームワークが素晴らしかったです。それぞれの責任と分担、コミュニケーションがパワーを生んだと思います。彦根市役所やひこねキャンドルナイト、各自治会などといったセクターとの調整やうちあわせも、しっかりとできていたようなので、安心して任せておけました。また、キャンドル教室やリサイクルキャンドルのスキルもアップし、最終的には生協でキャンドルを販売できたことはひとつの到達点だと思います。

とはいえ、キャンドル教室やキャンドルナイトも、やや依頼があって対応するといった姿勢がどうしても出てしまい、あかりんちゅとしての目指すべき方向などが、さらに絞られて加速できなかったことは少々残念です。もちろん、一年間でそこまではとても無理ですが、今の雰囲気が「後輩に任せよう」といった感じがあるのがやや残念です。合い言葉であった「株式会社あかりんちゅ」へ向かっての次の一歩をどう踏み出すのかを真剣に話し合って欲しかったと思います。その意味では、次年度あかりんちゅがどのような活動をメインにするのか、またお寺との関係はどうするのか、といった点でも、チーム＋後輩＋関係者を含めて話し合うと良いと思います。

個人的には、後輩ができたりしても、最初の立ち上げの「7 人の侍」は、その他活動があっても、必要なときには集まってやると言った関係が良いなと思います。また、福祉作業所との連携による、販売事業化について、本気で取り組む人が何人か出てくることを待っています。お疲れ様でした。

06 Let's 複合

チーム名 廃棄物バスターズ
代表者 西阪健一
代表者所属 工学研究科
メンバー数 19 人 （うち学生コアメンバー４人）
指導担当教員 徳満勝久
活動場所 彦根市内、滋賀県内
関係団体 上西産業、彦根市清掃センター他
活動概要 独自に開発したリサイクル技術で、廃プラを材料とした「リサイクルプランター」の開発に成功。さらにプラスチックの「完全循環型ビジネスモデル」を提案します。

チームからの活動報告

成果 - できたこと -

小学生への環境出張講座は小学校に出張することはなかったが、他のイベントにおいて小学生に環境すごろく、環境クイズをすることができた。
しかし、小学校に実際に出張し環境教育を行ったほうが小学生の勉強になると感じた。SIFE に出場し、準優勝、ルーキー賞を受賞することができた。

課題 - できなかったこと -

彦根市の廃プラの循環モデルを県内の他の自治体に展開、その他の商品展開については全く取り組めなかった。活動を進めていく中で計画になかった新しい活動を重点的に取り組んだためである。
最初の計画の半分ほどしか達成できなかったが
新たな取り組みができたことは良かったと考えている。

活動を振り返って

1．環境教育普及活動ー“ 環境クイズ ” イベントの取り組みー、2．SIFE JAPAN 国内予選大会への参加と入賞、3．外部への情報発信（依頼講演等）と共同で実施した事業の３点を実施できた。

それらを通じた今後の課題としては「新たなフェーズ作りが必要」ということが挙げられる。廃棄物バスターズの知名度も上がり、各種イベントへの参加及び講演は増える傾向にあり、活動の定着は図れているものの、今後は“ 新生 ” 廃棄物バスターズとしての新たな活動フィールドの開拓も重要な課題である。

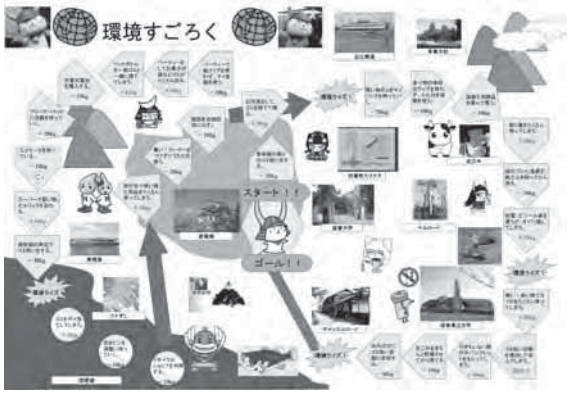
また、“ リサイクルプランター ” の知名度も上がり、グリーン購入エコ商品として全国展開されるようになってはいるものの、我々が提唱する“ 廃プラの地産地消 ” を目指した地域循環プロセス普及活動は遅々として進んでおらず、来年度以降の重要な課題の一つとして認識している。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	SIFE に出場したことによって英語でのプレゼンテーション力を得ることができた。
①専門知識・技術	✓	二酸化炭素排出の計算方法、考え方等を得ることができた。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	さまざまなイベントに参加し幅広い年代の方と話すことによってコミュニケーション能力が身につきました。
⑤問題解決力	✓	
④企画・プロデュース力	✓	環境クイズだけでなく小学生が参加型で楽しめるように環境すごろくを提案した。
⑦学内での新たな出会い・交流	✓	彦根市の二酸化炭素排出量算出によって彦根市の職員の方とのつながりができた。
⑧その他（プレゼンテーション力）	✓	小学生への環境教育（環境すごろく、環境クイズ）、廃棄物バスターズを PR する活動を通じてプレゼンテーション力が身についた。

成果物／制作物

楽座新聞



環境すごろく

総括

指導教員から　工学部　徳満勝久

あらゆる意味において、今年の活動は「SIFE から始まった」と言っても過言ではない。一ヶ月という限られた時間の中で、夜遅くまで協議を重ね、英語での発表練習と発表時間を見計らってのパワーポイントの修正等を繰り返す毎日であった。その甲斐あって、SIFE では一次予選会での ” 僅差の勝利 ” にも係わらず、決勝では準優勝とルーキー賞のダブル受賞を果たすことができた。また、SIFE という格式と伝統のある世界規模の学生大会で、並み居る有名大学より優れた活動として「滋賀県立大学廃棄物バスターズ」が評価されたことは、学生たちにとって大きな自信と励みになったのではないかと思う。そして、この時点では ” この自信を元に、今年度の廃棄物バスターズの活動は、今までより更に活発になるのでは？ ” と大いに期待していたが、事態は全く逆の方向に進行していった。学生たちは SIFE で入賞したことを、「自分たちの成果が評価されたのだ！」というように過信し、過去の幾多の先輩たちの地道な活動（種）が、現在の自分たちの評価（果実）の礎になっていることを忘れてしまっていた。それ故、SIFE 以降、学生たちからの積極的な行動計画や実施したい活動、新たなフェーズ ” 新生廃棄物バスターズ ” に向けた新たな取り組み等についての相談は殆どなくなった。唯一、外部からの環境教育や講演の依頼、ポスター発表や各種展示会への出展等に ” 細々と参加させて頂く ” だけの活動になってしまった。また、地域のボランティア団体「ひこね盛り上げ隊ーキレイキャンペーン隊ー」としての活動も停滞気味であり、TV 取材や ” ゆるキャラ祭り ” 等のイベント時は参加するものの、日頃の地道な ” 地域の美化・清掃 ” 活動に参加する学生が少なくなっていることを痛感した 1 年であった。

これからの廃棄物バスターズの活動は、本当の意味での ” 学生主導の近江楽座 ” としての真価が問われることになり、” 新生廃棄物バスターズ ” を目指して再度学生たちの中で ” 活動することの意味付け ” について考える必要があるように思う。” 高い評価 ” の裏に潜む ” 崩壊への過程 ” を如何に回避するか、今後の学生たちの行動に注目したい。

近江楽座活動年度　H16　H17　H18　H19　H20　06

07 七曲がり仏壇職人にまつわる絵本作成プロジェクト

チーム名　七曲がりでいっちょやったるか！！
代表者　清水愛子
代表者所属　人間文化学研究科
メンバー数　15 人 （うち学生コアメンバー４人）
指導担当教員　武邑尚彦、黒田末壽
活動場所　彦根市の通称「七曲がり」
関係団体　-
活動概要　彦根仏壇の生産地として有名な「七曲がり」仏壇職人さん達の歴史や想いを聞き取り、絵本や紙芝居を作成して子ども達や地域の人に発信します。元気に、楽しく、おもしろくをモットーに活動をしています。

チームからの活動報告

成果 - できたこと -

チーム会議を増やしたことで、メンバーの共有知識が増えた。少ないメンバーのため、それぞれが自分の仕事に責任をもつことができた。地域の人々に「ななちょ！」について興味をもってもらえた。紙芝居制作を集中して行ったことで、一貫性のある活動になった。

課題 - できなかったこと -

き取りなどに行く際の時間調節が上手くいかかった。（時間が長引いてしまう、など）
ほとんど全メンバー参加だったが、個々人の活動も多かった。試作品を作る段階で、考えていたよりも時間がかかってしまった。
（↑今後は、試作品検討期間が必要かと思われる。）

活動を振り返って

活動一年目ということもあってか、七曲りという地域に関わったというよりかは、特定の方々にお世話になったという印象が強い。その分、聞き取りから紙芝居作成まで本当に貴重なアドバイスを頂いた。今後は、読み聞かせを通して、子ども達やその親世代の方々との関わりを増やし、絵本作成を進めていきたい。その中で、七曲りという“地域”に関わるような活動に繋げていきたい。

「こんなに手間のかかる、こんなに高いお仏壇が、なぜ必要なのだろうか」このように、ふと感じることがあった。しかし、ご先祖さまがお浄土に行けるように手を併せ、自分が死んだ後も子孫が手を合わせる、その前にはいつもお仏壇がある。聞き取りなど、実際に地域の方々と話す中で、手を合わせるという豊かな行為そのものも含めて学ぶことができたのが、この活動の大きな成果であった。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	①七曲り仏壇職人に関する知識を、活動を通じて得る事ができた。その他、紙芝居作成においても作っておられるサークルに参加して知識を得たり、聞き取りや写真の情報を元に、様々な技術を得ることができた。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	
③計画力・スケジュール管理能力		②学生が地域に入ることへの理解をしていただくことが一番重要だと考え、できるだけ丁寧に、自分たちの思いを再度確認しながら伝えるように努めた。その結果、段々とこのチームの思いを分かって下さるようになった。
④企画・プロデュース力		
⑤問題解決力	✓	⑥聞き取りを進める中で、同じような思いを持つ地域の人たちと出会い話すことができた。チームとしての信頼も得て、色々なお願いをして頂けるまでになった。
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	
⑦学内での新たな出会い・交流	✓	⑦新年会やゾロゾロ会などの交流会に参加する中で、後日学内で会った時に声をかけてもらうことがあり、新たな出会いが生まれた。その他、びわこ毎日マラソンのイベントで模擬店を出店し、他の参加チームとも顔見知りになれた。
⑧その他		

成果物／制作物

ななちょ！ビックニュース

ちょっと聞いてよ プロジェクト自慢

後期の活動報告

地元の声

課題と成果

楽座新聞

紙芝居

総括

指導教員から　人間文化学部　武邑尚彦

本プロジェクトのねらいは、NPO 法人リンクスと学生が連携して、彦根仏壇の本拠地「七曲がり」における仏壇職人をテーマに紙芝居を制作し、当該地域の生活文化や伝統の技術、そしてそれらの意義などをひろく紹介しようとするものである。

活動に入る前から見えていたことは、七曲がりの暮らしを支えてきた仏壇作りが、グローバル化の荒波のなかで衰退の一途を辿っているという事実であった。このことを素直に受け止め、自分たちで出来ることは何かないかと考えたのが、このプロジェクトを立ち上げた学生たちである。

聞き取りは、NPO 法人リンクスと仏壇職人の方々のお力添えで順調に進んだ。紙芝居作りには、新たな技法も開発された。すなわち、ひとつの場面を何枚かの絵に分けて描き、それらをコンピュータに取り込んで、その後に合成する手法である。ストーリー作り、描画や彩色など、それぞれが得意とする分野を担当し、地域の方たちにも試作品を見てもらってコメントをいただき、かなりレベルの高い作品が仕上がったと思う。

４月には、七曲がりに開設されているコミュニティハウス「七曲がり三軒茶屋」で本作品のお披露目が予定されている。また、５月の連休明けには交流センターのホワイエで原画展を開催し、ホールでは原画を拡大投影しながら紙芝居を実演する予定である。さらに６月６日から２週間、県立図書館で原画展と実演をかねた講演会が予定されている。さらには、この作品を絵本に仕上げようという企画も模索中である。

とにかく、次々に新たな試みにチャレンジする、なかなか立派な心意気を持った学生たちで、敬服することしばしばである。

近江楽座活動年度　H16　H17　H18　H19　H20　07

08 とよさらだプロジェクト

チーム名 とよさらだプロジェクト
代表者 森愛鐘
代表者所属 人間文化学部
メンバー数 21 人 （うち学生コアメンバー３人）
指導担当教員 増田佳昭
活動場所 豊郷町大町
関係団体 -
活動概要 使われていない農地を再生し、地域の方の知恵をもらいながら野菜を育てます。収穫した野菜は現在、大学の食堂に並んでいますが、今後の目標は学生独自のネットワークで販売先を広げていくことです。

チームからの活動報告

成果 - できたこと -

前期は計画的にベビーリーフを栽培・収穫し、サラダとして学食に出荷することができた。そのほかの野菜は、1 年を通して地域のお年寄りや農家さんにアドバイスをいただきながら栽培し、野菜作りのノウハウを学ぶことができた。

課題 - できなかったこと -

9 月以降、害虫被害が大きくなったことと、収穫担当メンバーが多忙になったことで、ベビーリーフを学食に出荷することができなくなった。
また、当初の予定では地域のお年寄りと一緒に栽培や収穫をする予定だったが、予想よりも作業が過酷だったことと、十分な収入を得ることができなかったことにより、実現できなかった。

活動を振り返って

当初の予定では、地域のお年寄りと一緒に栽培・収穫作業を行い、収入をお年寄りに還元することを目標にしていたが、今年度は達成することはできなかった。理由としては、夏のハウスは高温になり、作業が想像以上に過酷であったこと、作業量に相応する収入を確保することができなかったことが挙げられる。

そこで、春からは、地域との関わり方を転換しようかと考えている。まずは、月に一度豊郷小学校前の広場で開催されている朝市で、とよさらだの野菜を販売させていただこうと考えている。また、大学の湖風祭や豊郷町の祭などのイベント時に、とよさらだの野菜をはじめとする豊郷町で採れた野菜を使って調理した料理を販売し、地域の活性化につなげたいと考えている。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	①野菜の栽培方法など、地域の方からのアドバイスを受け実際に栽培することによって身につけることができた。夏には近所のお年寄りにハウスに来てもらい、トマトの剪定の仕方などを実際に教えてもらうことができた。
②交渉力・コミュニケーション能力		
③計画力・スケジュール管理能力	✓	③前半はきちんと計画を立てずに栽培したため、作業が間に合わずに収穫時期を逃したり、必要な世話をすることができなかったが、後半は前半の反省を生かして、こまめにミーティングを行い、計画的に作業することができた。
④企画・プロデュース力		
⑤問題解決力		⑥作業中などの近隣の方とのコミュニケーションにより、地域の農家の方や役場の方とつながりをもつことができた。２月には町役場で役場の方や地域の農家さんと会合を開き、今後さらに相互に協力して活動を展開していくことになった。
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	
⑦学内での新たな出会い・交流	✓	⑦メンバー募集のポスターを学内に掲示し広くメンバーを募集したことによって、さまざまな学部学科のメンバーが集まった。それぞれの得意分野を生かして、多様な視点からプロジェクトをすすめることができた。
⑧その他		

成果物／制作物

楽座新聞

総括

指導教員から　環境科学部　増田佳昭

農産物を生産して販売までしてみたい、できれば近所のお年寄りのお小遣いにつながればと始まったプロジェクトだが、開始後ほぼ一年、一定の成果が見えてきている。第一は、学生の継続的な農業体験の場ができてきたことだ。豊郷町で町のビニールハウスを借り受けて、リーダーは近くに居住している。土曜日には南彦根駅から自動車を出して作業を行っている。できたベビーリーフは（夏までだが）生協食堂に並んだ。こうした取り組みは一般に継続が難しいが、虫害や台風にもめげず粘り強く取り組んで、今日にまで継続している。それだけでなく、メンバーも一回生が新たに参加するなど、人的な継続性も確保されている。

第二は、農業体験の中で、虫害などの作物生産の難しさや台風など自然災害への対応の必要性、計画的作業の必要、売れるものを作ることの大変さ等々、学生たちは多くのことを学んだ。これらの体験を通して、自然や農業に対する「確かな」見方を身につけたのではないか。

第三は、この活動の中で、地域の農業者や周辺住民、行政関係者との関わりの環を拡げたことである。最近では休耕田の耕作を持ちかけられるなど、地元の信頼を勝ち取っている。関係者との交流や交渉を通じて、学生たちの成長も得られたものと考える。

第四には、組織面での習熟である。学生組織の運営に共通する課題ではあるが、当プロジェクトでは、農作業を具体的に行うことから、作業計画など継続的で効果的な組織運営は不可欠である。その経験は、社会に出てからも大いに役に立つものであろう。今後の課題について述べるなら、ひとつは生協出荷やイベント対応など目標を明確にしてより計画的に取り組むこと、もうひとつは組織としてのよりいっそうの継続性の確保である。22 年度もさらなる成長を期待したい。

近江楽座活動年度　H16　H17　H18　H19　H20　08

09 信・楽・人
-Shigaraki field gallery project-

チーム名 信・楽・人 -Shigaraki field gallery project-
代表者 御子柴泰子
代表者所属 人間文化学研究科
メンバー数 29 人 （うち学生コアメンバー２人）
指導担当教員 印南比呂志
活動場所 信楽町長野
関係団体 窯元散策の wa
活動概要 拠点としてギャラリー「shiroiro-ie」をつくり、「field gallery project」をテーマに、信楽に潜む地域の魅力を再発見、再構築します。まちを楽しみ、驚き、発見してもらえるような場所にしていきます。

チームからの活動報告

成果 - できたこと -

人物マップ…昨年度までのヒアリング内容をまとめ、東京建築コレクションで発表。**窯元散策路サイン・マップ…**マップが完成し・発行。**企画展示＋イベント…**夏に本学デザイン学科の課題発表の展示を、秋に社会人＋学生（京都工芸繊維大学）のグループ展を行った。秋の展示では関連企画も充実。**shiroiro-ie 整備…**ギャラリー shiroiro-ie の補修や展示台の増加、看板設置、庭に塀をつくるなど、整備を進めた。

課題 - できなかったこと -

人物マップ…今年度のヒアリングを成果物として発表することができなかった。
散策路サインマップ…サインの制作をすることができなかった。来年度に持ち越すことになっている。
企画展示＋イベント…年３回行う予定だったが冬の展示を行うことができなかった。また、広報の方法も課題となっている。（来客者にフライヤーを送付しているが、リピーターとして再び訪れる率はまだ低い。）

活動を振り返って

雑誌掲載効果で、shiroiro-ie には予想以上にお客さんが増えた。それは喜ばしいことだったけれども、そのために展示棚を増やしたりと、とくに前期は shiroiro-ie の整備にかなり時間を割いた。メンバーが少ないので、その分、当初予定していた人物マップが大幅に進めることができなかった点は、大きな反省点として残った。

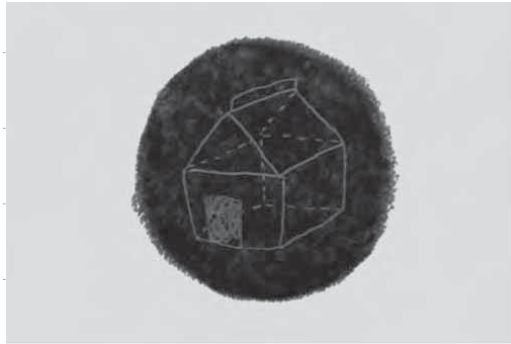
今年度は対外的な場所での発表の多い年でもあった。奈良県立大学での発表、金沢大学とのディスカッションでの場、トウキョウ建築コレクション。それぞれ、チームの活動や近江楽座を外の目にふれさせるよい機会となった。実働メンバーの不足が今年度の大きな課題となった。来年度の活動に向けた人材を確保すべく、春のイベントスタッフとして現在学生を募っている。本チームの活動は来年度で４年目となるが、その間、地道に通い人脈をつくってきたかいあって、興味深い話を地元の方からいただけるようになってきた。来年度は、shirorio-ie を拠点に、さらにフィールドへ出ていく年としたい。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術		①人物マップのためのヒアリング、ギャラリーを訪れるお客さんや地域の方など、多様な人と交わる機会が多くあり、コミュニケーション力の向上につながった。各人が信楽がどのように感じているかという事についても知ることが多くあった。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	
③計画力・スケジュール管理能力		④企画展・イベントを通して、ギャラリーオーナー、出展者、カフェ経営者を関連づけた企画を考えた。
④企画・プロデュース力	✓	
⑤問題解決力		
⑥地域の方との人的ネットワーク		
⑦学内での新たな出会い・交流		
⑧その他		

成果物／制作物

楽座新聞



イベントDM

信楽マップ

総括

指導教員から　人間文化学部　印南比呂志

経済不況の波によって閉塞感が強くなってしまっている陶器産地、信楽。それは、経済のみならず地域のコミュニティや、さまざまな人間関係にも及んでいる。その中で、近江楽座・信楽人の活動は、地域のつながりを再生する取り組みである。このプロジェクトによって生まれた shiroiro-ie を拠点にさまざまなイベントや学生活動を発信している。県立大学の卒業生や他大学の学生にまで参加協働させてしまう磁場がある希有な活動でもある。そのエネルギーが閉塞感漂うこの地域への一種の清涼剤になるべく、学生たちは飄々と活動している。

この姿が地域の中でまだ異質に見えるうちは地域活動として根ざしていないのかもしれない。しかし、3 年間続いてきているこの活動が、地域の人たちの目に次第に日常になってきていることも確かである。継続の難しいプロジェクトである。しかし、来年度もまた、新たなメンバーによって飄々と活動している姿を見られるはずだ。

近江楽座活動年度　H16　H17　H18　**H19**　**H20**　09

10 とよさと快蔵プロジェクト

チーム名 とよさと快蔵プロジェクト
代表者 西村眸
代表者所属 環境科学部
メンバー数 40 人 （うち学生コアメンバー７人）
指導担当教員 迫田正美
活動場所 豊郷町
関係団体 NPO 法人とよさとまちづくり委員会他
活動概要 私たちは、豊郷町を楽しく活気ある町へと蘇らせることを目的に、民家の改修や、イベントの実施に取り組んでいます。今年度も、空き家の新しい可能性や活用法を探り、10 軒目の改修を目指します。

チームからの活動報告

成果 - できたこと -

ほぼ計画通りにイベントの実施を行うことが出来た。イベント時やタルタルーガ、取材等での広報活動で快蔵プロジェクトの活動を広く認知してもらうことが出来た。活動の広報に力を入れより広く人脈を築くとともに、これにより多様なプロジェクトメンバーを得ることもできた。

課題 - できなかったこと -

当初の計画は、コミュニティハウス、ガレージプロジェクトを軸に進めていくつもりだったが、全てを実行するには至らなかった。目の前のことにとらわれて全体の展望が見えないままだったたが、より方向性を定めて活動を進めるべきだった。本年度は体制や引継ぎに関する課題が見えた。

活動を振り返って

これまでの６年間で多くのことが積み上げられてきたが、データや考えてきたこと、感じたことも含めて、先輩、後輩の間でもっと話し合いの場を持ち、情報の共有を行う様､努めていきたい。とよさと快蔵プロジェクトの活動の原点を見つめ、改修を続けていくためのシステムを見直す時期に来ているのではないだろうか。また、建築の学生に加え、本年度は人間文化学部の学生もコア・メンバーとして活動している。来年度からもより多様な立場のメンバーを集め、チームとして広い考え方をできるようにしたい。プロジェクト同士の関係も同じく、他の近江楽座プロジェクトとも協力してさらに魅力的な企画をしたい。今後の展望として、とよさと快蔵プロジェクトが発足して以来、まちづくり委員会とは協同して活動を進めてきたが、学生のメンバーも変わり、まちづくりも旧豊郷小学校を利用した新しい事業にも関わり始めている。そのような動きを捉え、学生からまちへの関わり方を提案し、ミーティングを持ちかけるなど積極的に動くようにしたい。タルタルーガにおいても、まちに開いたイベントスペースのような利用を目標として展開を図りたい。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	② ③ ④ ⑤ ⑥どろんこまつりを実施・企画することでイベントの運営の仕方、企業にスポンサーになってもらうことの意味などを学ぶことが出来た。運営するに当たりお金の運行や企画の進行計画などきちんと計画をたて、企業や町との信頼関係を築くことが最も重要であるとわかった。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	
③計画力・スケジュール管理能力	✓	
④企画・プロデュース力	✓	② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧タルタルーガの運営で地域の人との交流が深まった。経営をしていく上で問題に対応していくことも必要だった。視察などで利用してもらうことが多く、他県の人などにも活動を知ってもらうきっかけの場となった。
⑤問題解決力	✓	
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	①辻長蔵や西山邸の改修活動や前田邸の実測などを通して、実際に改修計画や改修活動を行い古民家に関する知識や改修現場での技術が得られた。フィールドに出て体感することでより深い経験ができた。
⑦学内での新たな出会い・交流	✓	
⑧その他	✓	

成果物／制作物

楽座新聞

イベントチラシ

総括

指導教員から　環境科学部　迫田正美

６年間の活動を通じて、実測、改修、利用提案などのノウハウが多く蓄積され、タルタルーガをはじめとして、まちづくり活動にも一定レベルの浸透が果たせている一方で、快蔵プロジェクトの今後の活動の方向性や、目指すべき目標について、学生自身が話し合いを進める場の必要性を感じる。OB も含め、５年後、10 年後の豊郷町（プロジェクト）の将来像と、それに向けて、学生として、また大学の立場でどのようなスタンスで活動していくのか、また、各プロジェクトやハウスの運営等、多岐に渡る活動を各々運営しつつ、全体を見ていけるような組織のあり方について、考える時期であると思う。これまでの活動だけでなく、学生としてまちづくりに活かせる活動を、しっかり考えてほしい。

11 一姓
～農業を県大にツナげて元気にする！～

チーム名	一姓
代表者	津田直人
代表者所属	環境科学部
メンバー数	10 人 （うち学生コアメンバー５人）
指導担当教員	近藤隆二郎、増田佳昭
活動場所	豊郷町雨降野、彦根市、余呉町
関係団体	NPO 法人五環生活
活動概要	一姓は、1. 雨降野の農業と県大を繋げる、2. 開出今の畑で県大畑を作る、3. 余呉の田んぼでコメを作る、という３つのプロジェクトを動かしています。小さな命を頂く大切さを「農業」を通じて学びます。

チームからの活動報告

成果 - できたこと -

すべての計画について言えることだが、話し合いをしっかりして活動計画を立て、イベントを実施することができた。月によって異なるが、野菜販売をほぼ毎週開催することができ、地区の方と学生を結びつけることができた。開出今町での野菜作りは近所の方の指導を仰ぎながら、自分達でダイコン、ニンジン、ジャガイモなどを収穫まで行うことができた。余呉町での稲作体験では当初計画した内容をほぼ完璧に実施することができた。

課題 - できなかったこと -

野菜販売は 1 回あたりの売上が数千円程度と事業を継続するには不十分であった。冬季の野菜の安定的な供給ができなかった。学生の購入意欲を高めることができなかった。開出今の野菜は味があまり良くないものがあった。時期植える時は、味が良くなるようにしたい。あとは野菜作りが不定期になってしまった。
余呉町での稲作体験は学生の参加が不十分であった。

活動を振り返って

新規プロジェクトということで、手探り状態の 1 年間だったと思う。余呉の田んぼ体験、開出今町の野菜作り、豊郷町雨降野地区の野菜販売、この 3 つのプロジェクトを 5 人のメンバーで進めていくことは、大変な部分があり、それが原因でどのプロジェクトも内容が浅く、曖昧なものになってしまった。自分たちでもっと細かな点について考えて活動を進めるべきであったと反省した。

来年度は人員の増加を図り、基盤を安定させていきたいと思う。今年実際に体験することで学んだこととして、PR の重要さが挙げられ、来年度はもっと活動の PR に力を入れ、スタッフおよびイベント参加者の数を増やしたい。そして、より多くの方と新たなつながりを生み出すことができたらいいなと思う。右も左もわからない状態の私たちに、いろいろアドバイスをして下さり、導いてくださった先生方、田んぼ体験の活動に関してお世話になった前田さん、野菜作りのアドバイスを下さった開出今町の地域の人々、雨降野の地区のみなさんに大変感謝している。その感謝の気持ちを忘れず、来年度もさらに前進して活動したい。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	①農業体験、野菜栽培を行うことで、いろいろな野菜の栽培方法を知ることができた。(害虫対策のために農薬を使わない方法を調べたり、地域の人に聞くことで、知識を蓄えることができた。)
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	
③計画力・スケジュール管理能力	✓	④余呉の田んぼ体験でのイベント企画（ヨガ体験や真っ暗カフェの開催等）を自分達で計画し、実行できた。大学内でほぼ毎週野菜販売を行うことができた。野菜販売や雨降野地区の方と合同で湖風祭の模擬店に出店することによって、地区の方を大学に呼び込み、学生と交流する機会を持ってもらえた。
④企画・プロデュース力	✓	
⑤問題解決力	✓	
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	⑥野菜の作り方が不慣れだった私たちに、開出今町の地域の方々が優しく教えてくださった。お礼にＢＢＱを開催し、とても喜んでもらえた。雨降野地区の方には、野菜作りのこだわり、調理方法、保存方法等を教えて頂いた。
⑦学内での新たな出会い・交流	✓	
⑧その他		

成果物／制作物

一姓新聞

地域創造inin奈良に参加

全国の学生が奈良に一同に集結

開出今町での野菜づくりについて

豊郷町雨降野地区のロゴマーク決定！

多くの学生、地区の方からの応募

びわこ毎日マラソンに出店

雨降地区の野菜をアピール

楽座新聞

総括

指導教員から　環境科学部　近藤隆二郎

３つのプロジェクトをやりきったことは大変すごいことだと思います。人数がそれほど多くないのに、農という場に取り組んだことは評価できます。一年目としての、手探りの中で、学内販売まで実施したことは、素晴らしいと思います。同時に、その中で見えてきた課題もしっかりと見据えて、今後の活動を模索していって欲しいと思います。

毎週販売ということが想像以上に大変であったということは、大事な体験であるので、その反省を見据えておくと良いでしょう。販売というコスト感覚の経験は、近江楽座にとっても大事な資産であると思います。また、今回は地域側のキーパーソンにも恵まれたこともあり、良好な協働関係であったと思います。ただ、いつもこのようなキーパーソンがいるとは限らないので、活動の軸をしっかりしておくことが大事でしょう。

今後に向けて、何を活動の主軸とするのか、できればシンプルなもので統一して新たなメンバーを募集してすすめるのが良いのではないでしょうか。大きなプロジェクトをまわしてきた経験から、それぞれの価値観や地域側ともあわせた上で、一姓としては何を軸にすえるかを打ち出すことが大事かと。そこに期待しています。まあ、でもよくやりました。

12 菜の花エネルギー

チーム名 菜の花エネルギー
代表者 森田銀
代表者所属 工学研究科
メンバー数 23 人 （うち学生コアメンバー 5 人）
指導担当教員 山根浩二、河崎澄
活動場所 学内
関係団体 菜の花プロジェクトネットワーク
活動概要 菜の花バイオディーゼル燃料を用いた教育活動を通じて資源循環型地域社会の実現を目指します。今年度は新たに南彦根駅ー県立大学で廃食油から精製した燃料を用いたバスの運行を検討します。

チームからの活動報告

活動を振り返って

総括

・菜の花の栽培に関しては、例年通り遊休農地を利用して菜種を収穫し搾油ができた。その中で課題点も見つかり，来年度の収穫に向けて改善した。

・高大連携授業では、バイオディーゼル燃料の手作り体験や作った燃料を用いたバイオディーセルカートの試乗を通じて、エネルギーの循環や多様性について理解してもらうことができた。

・小学校出前授業では，エネルギークイズや温度差を利用した発電実験の体験を通じて、身近なエネルギーについて楽しく学んでもらうことができ、地球環境を思いやる心を育み、環境に対する意識を高めることができた。

・湖風祭では，「脱石油生活！人力発電党！！」と題して、化石燃料を使用しない環境負荷の小さい身近な発電の体験を実施した。地球温暖化を防ぐために普段の生活で電気を節約することの重要性を認識してもらった。

・全学部の 1 回生と一部の 3 回生を対象としたバイオディーゼルバス（エコバス）実現に向けてのアンケート調査を実施した。エコバスの運賃を 100 円にし、かつ大学への直行バスにすると仮定した場合、利用率の増加が期待できる結果が得られた。

今後へ向けて

・菜種の収穫量を増やすために、種の蒔き方や除草剤処理方法の見直しを図った。それにより、例年より多くの菜種油を得て、それを用いて地域の方や湖風祭で天ぷら振舞い、廃食油を燃料化して再び菜の花栽培のために使用することで資源の循環を目指す。

・小学校出前授業に関しては、授業内容の質を高めるだけでなく、実験メニューを増やすことで、多くの小学校に出前をし活動の幅を広げる。

・湖風祭では、実際に発電した電力に対し化石燃料で発電した場合の二酸化炭素排出量を示す。これにより普段の生活で電気を節約することの意義をもっとわかりやすく説明する。

・エコバスの実現に向けて、県立大学 - 南彦根駅間でバスを運行している近江鉄道株式会社さんと直接議論できる場を持つ。今年度行ったアンケート結果から、エコバス運行の有用性を示し、運行実現を目指す。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	②遊休農地での菜の花栽培において、地域の方々とコミュニケーションを図り、草刈り機をお借りしたり、学生だけではできない作業（耕運機による施肥など）の多大なるご協力を頂いた。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	
③計画力・スケジュール管理能力	✓	④彦根市立城西小学校に小学校出前授業案を企画し、先生方との打ち合わせの後小学生に対してエネルギーや環境について楽しく学べる授業を実施できた。また湖風祭では足こぎ発電体験コーナーを設置し，消費電力が異なる電化製品の発電をしてもらうことで、足にかかる負荷の違いからエネルギーの重みを肌で感じてもらった。
④企画・プロデュース力	✓	
⑤問題解決力	✓	
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	⑥びわ湖環境テント村などの地域イベントに積極的に参加することにより，多くの地域の方と接することができ，人的ネットワークを広げるだけでなく，我々の活動の PR につながった
⑦学内での新たな出会い・交流	✓	
⑧その他		

成果物／制作物

2010年(平成22年)3月31日(水)　菜の花通信　2

後期の活動について
小学校出前授業は好評！
菜の花栽培も手ごたえあり！

ブロンズヴト自画自賛♪
天ぷら鍋から燃料タンクへ

突撃！一問一答インタビュー
世界一周ーバイオディーゼルアドベンチャー

地域のこえ
小学生の環境意識高く

今年度の課題と成果

楽座新聞

湖風祭イベントパネル

総括

指導教員から　工学部　山根浩二　河崎澄

山根浩二

菜種の栽培量が昨年よりも上がらなかったことは、天候や連作障害などいろいろ考えられると思うが、地域の方と連携して継続してゆくことが重要と思う。また，今年度はじめての事業として、小学校出前授業（実習）を行っている。この事業で、「企画（Plan）～打ち合わせ～実施（Do）～反省（Check）～次年度への提案・改善（Action）」のスキルが身につき、また小学生の事後の感想文にも、たいへん好感であったことが書かれており、今後は多彩なメニューを揃えて小学校への「出前授業･実習」あるいは「夏休み自習研究」を核に進めていってほしい。なお、エコバスに関しては今後さらに地道な交渉が必要である。バス会社の経営とも絡むため、なかなかむずかしいと考えられる。

河崎澄

本年度は小学校への出前授業という新たな試みにチャレンジできた年であり、これまでよりもさらに活動の幅が広がったであろう。また、その講座の内容も、安全でみんなが取り組むことの出来る「手のひら発電」や、劇を通しての楽しく分かりやすい授業など、小学生向けに工夫がなされており、その真摯な取り組みを頼もしく感じている。

今後、活動がますます充実することを期待している。

近江楽座活動年度　H16　H17　H18　H19　H20

12

13 Living Design 13th FASHION SHOW

チーム名　生活デザイン専攻１３期生
代表者　東知余美
代表者所属　人間文化学部
メンバー数　51 人 （うち学生コアメンバー 26 人）
指導担当教員　森下あおい、道明美保子
活動場所　学内、彦根市内、滋賀県内
関係団体　-
活動概要　滋賀の繊維産業に縁のある記事を利用することによって、地域産業について学生が学ぶと同時にまちに発信していきます。主催者と観客が一体となって楽しめるショーをデザインしていきます。

チームからの活動報告

活動を振り返って

1. 反省点を踏まえ、目標を持って取組むことが出来た。
→今年はコアとなるメンバーが少なく、活動を始めた当初はそれぞれが不安を抱えていた。しかし、何度も話し合いを行い進めていく中で目標が見え新たな活動を進めることができた。アートプロジェクトというワークショップを行うことで、実際に布に触れ服作りの魅力を体感するだけではなく、その服が変化していく面白さやショーに出る喜びなどを共有出来た。

2. 積極的に地域で行われるイベントに参加できた。
→すべてのイベントで行ったアートプロジェクトでは、年齢関係なくイベントに集まった多くの人と交流することができた。予想以上の人々に参加していただき私たち自身もその場にいる人々と一体化できたと実感している。今年初めての石山商店街でのショーは彦根市外での初めてのショーであったので活動の幅を広げることができた。４度のイベントに参加できたことでアートプロジェクトが充実できただけではなく、私たちの中でも自分の役割が明確化され、積極的に動くことが出来る様になったのは大きな変化だと言える。

3. プロの方に協力してもらいショーが充実。
→今年は多くのプロの方々に協力を得ることができた。朴アート祭り、湖風祭本祭ではプロの美容師の方々にご協力いただいたり、プロの映像作家さんにショーやメイクの風景も記録していただけた。

4. ファシリテーターから客観的な意見をもらえた。
→毎年メンバーが変わることもありすべてにおいて初めてであったため、運営や地域の方々との関わりあいの仕方において行き詰まることがあった。今回ファシリテーターに協力いただけたことで、活動を客観的に見て意見やアドバイスを頂き、より効率的かつ積極的に活動ができた。そして、今後の活動において次の世代に伝えていかなければならない課題もみえた。

今回協力頂いた方には「来年もぜひ」とおっしゃっていただいているので、このつながりを大切にしながらも、また次の世代ならではの形で活動を展開していってほしい。ショーの内容やワークショップの方法などは、地域の方々やプロの方たちと何度も粘り強く会議を繰り返した末に成功させることができたので、今後も議論しながら自分たちの思いを形にしていくといいと思う。ファッションショーの「ファン」を増やしていくことも重要である。

スキルアップ - 新たに得たこと -

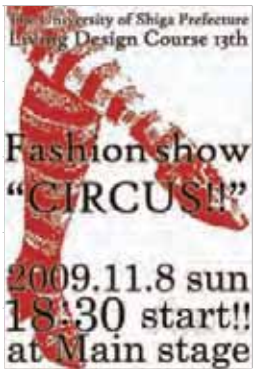
項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	①実際に服を作るにあたり、ほとんどの人が初めてであったが、友人から聞いたり、本で勉強したりして取り組み確実な成果がみられた。また、空間づくり、広報物の制作についても経験を踏むことができ、これまで以上に技術を得ることができた。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	
③計画力・スケジュール管理能力	✓	
④企画・プロデュース力	✓	⑤前年までのファッションショーにおいて問題と感じる部分についてみんなで話し合い、一つ一つより良い方法を考え実行していった。コンセプトをしっかり伝えるために、事前にパンフレットを配布したり、ショーに一貫性を持たせたり、地域の人とより交流を持つために、アートプロジェクトを行ったりした。
⑤問題解決力	✓	
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	
⑦学内での新たな出会い・交流	✓	⑥店の経営者や美容師の方、カメラマンの方と出会い互いに意見し合いいいものを作ることができ、来年もぜひ来てくださいという声を多く頂き、つながりが増えた。
⑧その他		

成果物／制作物

楽座新聞

ファッションショー作品集

ファッションショー
ポスター



総括

指導教員から　人間文化学部　森下あおい

近江楽座の活動も 3 年目に入り、過去の経緯を振り返りながら、今年度は何を目標とし地域との関わりや貢献についてどう考えるのかをあらためて話し合うことからスタートした。ファッションショーでは、企画イベントの構成にどのようなストーリー性を作るのか、如何に全体の空間や個々のデザインをまとめるのか、さらに人の協力体制を作りだすのが実に重要である。また、ビジネスを目的としないファッションショーでは、活動の参加者の自発的な行動や、情緒的な気分の高まりが活動の土台となる。こうした背景の中で、今年度は、人とのつながりを作ることをテーマに挙げて、多数のイベントが企画された。

今回の活動の特徴は、4 回というアートプロジェクトの実施において、客観的に活動の見つめ直しができる余裕が作り出されたことにある。エンターテインメントとしての意義が強いファッションショーでは、その成果は良し悪しを数値ではかるものではないため、一般的に活動の評価は当事者には捉え難い。その点今回は、活動を積み重ねる中で、デザイン活動の変化や成長を実感し、成果を各自がしっかりと見つめられたのではないだろうか。一方で、地域との関わりでは、アートプロジェクトで過去の年度よりも地域の方との距離を縮め、ファッションを通じたコミュニケーションの楽しさが生み出された。実際に布に触れ、それを衣服に貼り付けてもらうという簡便な試みも、常に眺めているだけのファッションショーとは異なる、新たなデザインのかたちである。

今後の課題は、大学の専門性をより活かした生活デザインとしての総合的な視野での目標を見出すことや、地域の素材の特性を活かすためのイベントなどによって、ここでしかできないファッションショーの存在感を生み出すことにあろう。作る側と受け止める側の双方の関係で継続されてきたファッションショーの活動が、ひとつの年度の終了とともに新たな課題を生み、それが土台なって次へと進んでいく。毎年、同じ繰り返しのようで、そのプロセスは毎年新しい。携わる学生が懸命にデザイン活動が地域とともにできることについて考え作り出す、この流れを今後も大切にしたいと考えている。

近江楽座活動年度　H16　H17　**H18**　**H19**　**H20**

13

14 石山アートプロジェクト

チーム名 いしアート
代表者 林宏美
代表者所属 人間文化学研究科
メンバー数 30 人 （うち学生コアメンバー２人）
指導担当教員 森川稔、佐々木一泰
活動場所 石山商店街周辺
関係団体 石山商店街振興組合、障害者授産施設「瑞穂」 他
活動概要 障がいをもつ人と障がいをもたない人が創造的な時間をともに過ごすことで、同じ地域に暮らす人として、互いに協働できる環境を石山商店街につくることを目的として企画を行います。

チームからの活動報告

活動を振り返って

1．石山商店街の方との関係

石山アートプロジェクトは今年度からの取り組みでしたが、1 年間（実質的には 7 ヶ月程度）にたくさんの経験をさせていただくことができた。これは、石山商店街のみなさんの協力によるところが大変大きい。商店街のみなさんがこのプロジェクトを受け入れてくださった理由は大きく 2 つあり、1 点目は、滋賀県立大学の学生が以前にも空き店舗利用のコンペで石山商店街の方と協働していたことである。2点目は、いしアートの取り組み内容が、商店街の方が現在取り組んでおられる内容にリンクしていた点で、商店街での活動が一段落したときに聞いたお話では、ハンディキャップを持つ人との協働は、今後、商店街としても取り組みたいと考えていたことだった様だ。このように、地域の方に学生のプロジェクトを受け入れてもらうには、学生からの働きかけに加え、タイミングや地域性のようなものも大きく関連していると考える。

2．知的障がい者授産施設瑞穂さんとの関係

知的障がい者授産施設瑞穂さんがプロジェクトに参加・協力してくださったこともこのプロジェクトの原動力になった。瑞穂さんは以前から地域のボランティアさんと協働したり、地域のイベントに参加するなど地域とのつながりを重視されていた。

3．つながりはじめた石山の人たち

活動全体の振り返りとしては、当初のいしアートの思いが、現在の石山を切り取って石山のアートとしてアウトプットする過程で、地域の中で地域の方とともに育っていったことが一番の成果だと考えられる。ハンディキャップを持つ人の余暇時間を地域の中で充実させたものにしたいということからはじまった石山アートプロジェクトが、これまでともに活動することの少なかった領域の人が集まって石山のアートをつくることで、石山の新たな人的ネットワークづくりのきっかけになった。これは、私たち学生チームが商店街をまわり、お話を聞きながら、作品づくりに協力していただいたことだけでなく、商店街の方が石山アートマーケットなど商店街の課題であった日曜日の活性化につながる事業をいしアートの企画にあわせて開催してくださったことなどもその要因になっている。それぞれの立場で、それぞれの視点で協働できたことが石山アートプロジェクトの成果であり、今後の展望にもつながるのではと考えている。

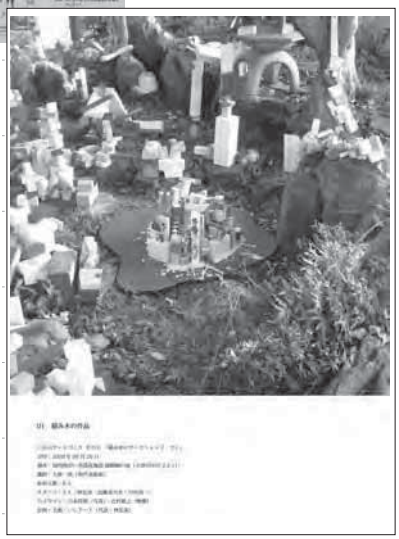
スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	②作品づくりに協力してもらうために、商店街のお店を一軒一軒まわった。最初は、好意的でないお店もあったが、何度も通ううちに協力してもらえるようになった。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	
③計画力・スケジュール管理能力	✓	④アートという新しい要素を用いて、石山の人をつなぐきっかけをつくった。また、いしアートの企画のきっかけに、商店街の方が日曜日の活性化に目覚めたとのコメントもいただいた。
④企画・プロデュース力	✓	
⑤問題解決力	✓	⑦石山のギャラリーでゴロゴロ会を企画してもらったことが交流の場になった。
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	⑧トウキョウ建築コレクション出展により、自分たちのプロジェクトを客観的にみることができた。
⑦学内での新たな出会い・交流	✓	
⑧その他	✓	

成果物／制作物

楽座新聞

イベントDM



展示パネル

総括

指導教員から（抜粋）　人間文化学部　森川稔　佐々木一泰

森川稔

石山商店街の多士済々な方々との関わりは楽しく、学生も一昨年から商店街のお世話になることになった。今年も、学生のアイデアとその実行力に大いに感心することになったのだが、今年の取り組みについてみると、次のような特徴を指摘できる。ひとつは、立場の異なる多くの人たちを「つなげた」ことである。まちづくりに今、最も求められているのは、人と人のつながりを生み出していくことにあるが、障がい者と健常者というつながりに加えて、アーティスト、子ども、若者、親子、そして商店主など、幾重にも織られた新たなつながりを生み出した。ふたつめは、石山商店街に“アート”というものを持ち込んだことである。（中略）そして３つ目に、一過性のイベントに終わらないことである。商店街は今回の取り組みをしっかりと受け止めてくださり、来年度以降も継続して応援してくれることを計画している。石山商店街では、「地域と歩む“暮らしのひろば”石山商店街」をテーマに、様々な取り組みが始まっている。この石山アートプロジェクトは、これからの石山商店街づくりに、きらりと光る新たな芽を開かせたことは確かである。

佐々木一泰

「いしアート」における石山での活動に対して、指導教員の一人として、学生としてどのように関わるべきか、またそれが地域に対してどのような社会的意味があるのかを中心にプロジェクトの開始まで議論を行った。それによって行われた様々なプロジェクトの成果は、イベントの成果だけではなく、商店街の新たなプロジェクトへのきっかけをもたらす事となった。このプロジェクトの効果として、メディア等の掲載もあるが、客観的にこのプロジェクトがどう見えるかを分析し、その手法について、様々な場所へ発表する試みを行った事が挙げられる。（中略）５年前に県大に赴任した際、県大生が地域へ自主的に活動している事に驚いた。今もその驚きの印象は色あせていない。大学を取り巻く環境の変化により、学生が地域に出る時間を確保するのが難しくなりつつあるが、これからも色々な活動で驚かせてほしいと思う。

近江楽座活動年度　H16　H17　H18　H19　H20

14

15 ART FORUM 2009 DIG'S
ー近江八幡を掘り出せー

チーム名	DIG'S
代表者	川内愛子
代表者所属	環境科学研究科
メンバー数	35 人 （うち学生コアメンバー 11 人）
指導担当教員	柴田いづみ
活動場所	学内、近江八幡市
関係団体	ヴォーリズ展 in 近江八幡実行委員会
活動概要	時代の変化により、人の記憶から地元の良さが消えていく現代、近江八幡の良さを引きだすチームを結成。今秋開催されヴォーリズ展に向けて、キッズ学芸員をプロデュースし、まちを盛り上げます。

チームからの活動報告

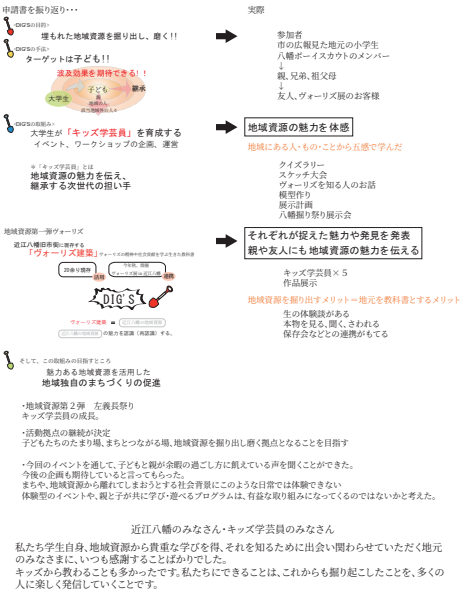
成果 - できたこと -

私たち学生自身も、子どもたちと一緒に地域資源を学び、学んだことを自分たちの活動コンセプトに加えて、向上していくことができたことが良かった。ヴォーリズ展という、子どもたちにとって記憶に残る発表の場を活用したことは、メディアで取り上げられたり、たくさんの人に発表ができたり、まさにキッズ学芸員の手法のねらい通り大きな波及効果をうむことができた。ヴォーリズのキッズ学芸員とのつながりから、近江八幡とのつながりが濃くなった。ワークショップでの作品の展示会場づくりは、キッズ学芸員の拠点へと発展した。築 100 年の町屋で子どもたちは、制作し、発表した。町屋の継承もできた。

課題 - できなかったこと -

広報の時期や、種類がわかっておらず、少人数で身内の協力を頼りとしてしまった。子どもに教えるというノウハウの準備不足もあった。

活動を振り返って



スキルアップ - 新たに得たこと -（一部抜粋）

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	①ヴォーリズを直接知る人からのお話から学ぶことができた。 クイズラリーを作成するために、何度も町歩きをし、ヴォーリズについてメンバーで勉強した。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	
③計画力・スケジュール管理能力	✓	④計画の途中、新しいアイディアを汲み取ったり計画を練り上げることができた ・八幡掘り祭りをプレ発表会とした ・キッズ学芸員認定書授与式を最後に行った
④企画・プロデュース力	✓	
⑤問題解決力	✓	⑥ヴォーリズ関係者、小学校、公民館、ボーイスカウト、ヴォーリズ展スタッフである近江八幡市民の方々、キッズ学芸員参加者・家族
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	
⑦学内での新たな出会い・交流	✓	⑦地域資源第一弾ヴォーリズとすることで滋賀県民の他学部のメンバーを加えることができた。後期の左義長の掘り起こしの際、「食からつながる」というイベントに、エコキャンパスプロジェクト竹林プロジェクトと一緒に参加した。
⑧その他		

成果物／制作物

楽座新聞

ミニパンフレット

総括

指導教員から　環境科学部　柴田いづみ

近江楽座も何年にも渡り、着実に成果を出してきていると思います。
資金のやりくりの中で、キッズ学芸員のワークショップスペース、展示会場、拠点作りとして 9 月の八幡掘り祭りでのカフェＤＩG'Sのプレオープンま でに、ハードとしての雨漏り町家が整備（まだ完成はしていませんが）されました。

ソフトとしての「キッズ学芸員」は、夏のキッズ学芸員学習会から始まり、スケッチ 会､ヴォーリズ建築の特徴のある建物模型作成をし、八幡掘り祭りの当日にはカフェ ＤＩG'Sに、キッズ学芸員による「ヴォーリズさんのまち」が出現していました。

ヴォーリズ展会期中は、学生とキッズ学芸員が一緒に、近江八幡中心市街地各所に分 散している会場を回り、来場者にヴォーリズさんの事､ヴォーリズ建築について解説 をしています｡ヴォーリズ展最中にワンストップの休憩所として機能しました｡キッズ学芸員によれば、「たまり場」ができた事になります。これらは、地域での信頼関 係がなければ成り立たない事業でした。学生達のこれらの動きは、グループ名のとお り地域資産や後継者を掘り出したことになり、市民や来場者から感謝を持って評価さ れたのも特筆できる事でした。

近江楽座活動年度　H16　H17　H18　H19　H20

15

16 発信基地 in 朽木の森

チーム名　くつきチーム
代表者　山形蓮
代表者所属　人間文化学研究科
メンバー数　15 人 （うち学生コアメンバー５人）
指導担当教員　武邑尚彦
活動場所　高島市朽木
関係団体　社会福祉法人ゆたか会　他
活動概要　お年寄りへの聞き取りを軸として活動を続けて５年。今年度は人間関係という形に表せないものを大切にして、地域とまっすぐ向き合いながら、今後のくつきチームの地域活動のあり方を探る１年にします。

チームからの活動報告

成果 - できたこと -

今年度の活動は、老人ホームの利用者への聞き取り活動と朽木の伝統食「鯖のなれずし」作り・活用という、大きく２つに絞られた結果になった。老人ホームの活動も、伝統食を自分たちで作り、それを地域外に向けて伝えていくということも、今年度からの新しい試みで手探りの部分が多かったが、地域の人との出会いの中で活動内容が徐々に定まっていったという点では、活動内容自体は充実していた。

課題 - できなかったこと -

絵本の活用については人員不足もあり手が回らなかった。ミーティング・記録・ドキュメンタリー作成については、当初チーム内の意識の向上やくつきチームの地域活動のスタイルの見直しを目的としていたが、実際の作業に追われた部分もあり、お互いの意見をじっくりと話し合う場や環境を作ることができなった。老人ホームでの活動は、聞き取りは行えたものの当初ほど多角的に活動の幅を広げることができなかった。

活動を振り返って

今年度は、当初からくつきチームの第一期最終年と位置づけ、チーム内部の意識にじっくりと向き合い、チームとしての地域活動のありかたについて、メンバー全員が主体的に考え動くことのできるような環境づくりを、大きな目標として掲げてきたのであるが、予定よりも人員不足になり、話し合いに時間を割く余裕が生まれず、作業をこなすことに終始してしまった。それにより、個々の活動の成果はある程度出るものの、そこへ取り組む意識というのを高めることを怠ったため、一つ一つの活動が独立し全体の流れというのが失われる結果になってしまったことが、今年度の大きな反省点となった。

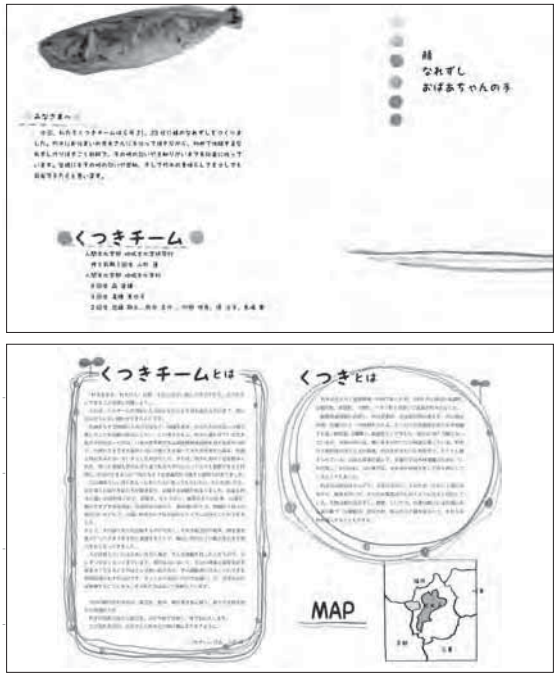
メンバーの多くが、朽木以外の場所で地域活動を行っているという形になった今年度は、結果的にくつきチームの第二期への土台を作れたとは言いがたい。来年度からの方向性としては、６年間築いてきた本チームと朽木との関係というものを簡単に手放すことは避けたいが、活動を行う当人がもっと自由な発想で地域と関わり、学生と地域の人双方にとって意義のある活動体制を模索していきたい。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	②今年度新たに老人ホームで聞き取りでは、これまでのような長年関係を築いてきた方への聞き取りとは違い、初対面に加え認知症の方という条件の中、限られた時間で聞き取りを行うという挑戦であったが、コミュニケーション能力は格段に向上できたように感じる。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	
③計画力・スケジュール管理能力		
④企画・プロデュース力	✓	④これまではイベントをする機会の比較的少ないチームであったため、ブース出店の際には商品の買い付け、ブースのセッティング、段取りや分担、備品の準備など、このメンバーでは初めての経験をたくさんし、イベント面での経験値を上げることができた。
⑤問題解決力		
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	
⑦学内での新たな出会い・交流	✓	⑥ネットワークの拡大はなかなかできなかったが、地域の方に新しいメンバーと顔を合わせる機会を意識的に作ったことにより、学生の活動のひとつの課題である、世代交代の中での地域からの信頼維持・獲得の基礎ができた。
⑧その他		

成果物／制作物

楽座新聞



パンフレット

総括

指導教員から　人間文化学部　武邑尚彦

自然環境が、生物多様性と自然の物質循環を基礎とし、生態系が微妙な均衡を保つことによって成り立っているのと同様、人間も老若男女が絡み合ってこそ、創造性あふれる豊かな地域社会が構築されるのではないか。いあわば、みんなちがって、みんないい。そんな理解に基づく地域づくりは、如何にして可能か。

このチームの醍醐味は、年度ごとにメンバーが入れ替わっても、こうした発想を具体的活動の根底に保持し続けてきたことにある。

チームメンバーは、活動に参画することを通して、豊かさとは何かを問い続け、互いに喜びつつ学び合える活動を実感し、その実感を別のシーンにも活かして生きる。そうした学生生活を、彼らは気負わずに、まさしく自然体で実践している。大いに愉快である。

もちろん悩みはつきない。とりわけ今年度は、参画したメンバーが少人数であった。しかし、その現実にいかに対応するかも、彼らにとっては大いなる学習である。チームメンバーの飽くなき探究心が、そうした学習を大いに深化させている。傍目にも、何とも愉快なチームである。今後の活動が大いに期待されるところである。

近江楽座活動年度　H16　H17　H18　H19　H20　16

17 ケンダイ地球座

チーム名　ケンダイ映画館をつくる会
代表者　櫻井奈那
代表者所属　人間文化学部
メンバー数　19 人 （うち学生コアメンバー８人）
指導担当教員　武田俊輔、近藤隆二郎、野間直彦
活動場所　学内
関係団体　彦根でロッカショを考える人のネットワーク　他
活動概要　環境・食をテーマとしたドキュメンタリーの映画の上映と講演会、環境に配慮した食品等の販売ブース出店するイベントを企画します。映画や来場者の方との交流を通じ、私たちや地球の「未来」を考えます。

チームからの活動報告

成果 - できたこと -

突発的な問題、例えば上映予定作品の未完成問題などにも柔軟に対処できたと考えている。当初計画していたよりも、企画に時間をかけることで、一つ一つの活動にコンセプトとテーマを持って望む事が出来た。

課題 - できなかったこと -

当初の予定よりも変更点が多く、またスタッフ不足という問題により時間がかかってしまうことが多々あった。そのため、本来ならば重視すべき広報のための時間が削られてしまうことがあった。
今年度で得た上映会運営のノウハウを、次年度以降に生かすべく、「スタッフ不足の解消」という課題を解決しなければならないと感じている。

活動を振り返って

活動を総括してみると、年間を通じて一つ一つの活動に目標やテーマを持って臨むことができ、参加していただいた方々からも好評だった。

今後の活動では、少人数・大人数それぞれの規模での長所を生かした上映会を開催していきたい。ネットワークを深めることと広げることの両面を充実させるため，少人数開催・大人数開催というそれぞれの特徴を生かした活動を、今後行なっていきたいと考えている。映画というメディアを通じて､県南部におけるニーズの存在にも目を配りつつ、地域でのネットワーク形成につなげていきたいと思う。ただし今後、こうした展開をしていく上で必要となってくるのは「人材の育成」であると考えている。上映会への学生の参加者が少なく、コアメンバーとして活動に携わる学生の増加が望めない現状をどう改善していくかが課題である。

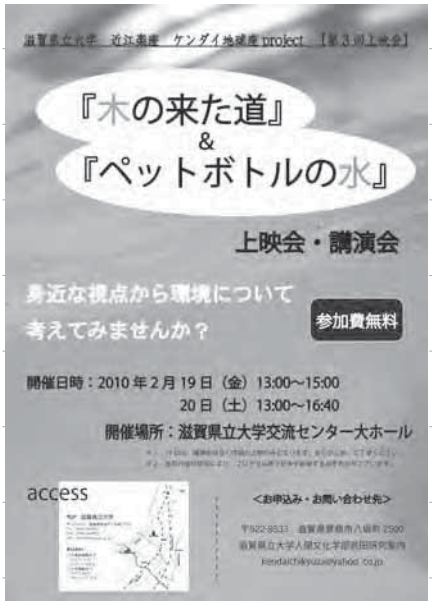
地域の方々には、一年間を通じて本当に親身になってご指導・ご支援いただき、この場をお借りして感謝の意を表したい。今後とも、ご指導・ご支援いただき、上映活動を続けていくことができればと考えている。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	①上映作品や、作品に対するディスカッションを通じて、原発や環境問題、またそれらが地域社会に対してもたらす影響に関する専門的な知識を、自分たちの身近な資源や食ともつなげつつ、身につけることができた。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	
③計画力・スケジュール管理能力		②外部講師招聘にあたり、また地域の方々と上映会のテーマや運営方法について議論を重ねる過程で、自分たちの問題意識を言葉として表現していくコミュニケーション能力や交渉力が身についた。
④企画・プロデュース力	✓	
⑤問題解決力		
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	⑥地域の方々と映画のテーマや運営方法をディスカッションすることを通じて、普段から環境問題に取り組んでいる方々の視点からより具体的で分かりやすいテーマを生み出し、共に映画を通じて環境を考えていく議論を共有する場が生まれた。また上映会とそこでのディスカッションを通じて、地域と大学と同時に、地域住民同士のネットワークの広がりにも貢献することができた。
⑦学内での新たな出会い・交流		
⑧その他		

成果物／制作物

楽座新聞



上映会チラシ

総括

指導教員から　人間文化学部　武田俊輔

「ケンダイ地球座」は，一昨年７月に地域住民からの強い要望をきっかけに地域住民・学生・教員の協力で 600 人以上の参加者を集めて開催された「六ヶ所村ラプソディー」上映会・監督講演会がもとになっている。当初、原発問題という関心に端を発していたこの取り組みは原発にとどまらない環境問題一般に対して関心を持ち活動する人々の結節点ともなった。当初の予定とは異なる、食と環境を結びつけた「アースカフェ」や「木と水」といった身近な資源から環境問題を考えて議論するという方向性が生まれたのは、上映予定だった映画の完成の延期という事情だけでなく、こうした展開ゆえでもあった。どこかよそよそしい「環境問題」でなく、自分たちの身近にあるものから環境を考えていくための学生たちのアイデアとしてよく考えられた内容であったと言えるだろう。また映画の舞台となった地域の住民へのインタビュー調査の結果を関連団体の人々へ還元したり、上映した映画の制作に深く携わった方々をお招きした充実したディスカッションも、参加された地域住民から高い評価を得ていた。内容面でこうした高い評価を与えられる一方、広報活動や学内でのネットワークという点では課題が残った。第 1・2 回の上映会は関連団体のコアメンバーの協力を得て当初の想定通りかそれ以上の観客を集めたが、その大半が環境問題に関心を持つ地域住民であり学生の参加は極めて少なかった。これは時期や場所（第 1 回が大学サテライトプラザ・彦根で夏休み初日，第 2 回が湖風祭）の問題もあるが、学内での宣伝がポスターやビラ配布などにとどまったこと、また自分たちがやろうとしていることの魅力を十分に他の学生に対して伝えるための表現力を欠いていたことが根本的な問題であった。滋賀会館が廃館となり、滋賀県でドキュメンタリー映画が上映される機会は今後極めて少なくなる現在、県立大学でのケンダイ地球座の取り組みへの地域住民からの期待は高い。また、映画の上映とそれと共に行うディスカッションを通じて、これまで関わりの薄かった住民や団体、また大学と住民のネットワークが広がるという効果が見られている。こうした点からも期待される活動であり、今後学生への広報とスタッフの充実を通じて、継続していくべきものである。

近江楽座活動年度　H16　H17　H18　H19　H20

17

18 キネ・コモン石寺

チーム名 エコ民家倶楽部＋
代表者 三田恵理子
代表者所属 環境科学部
メンバー数 17 人 （うち学生コアメンバー４人）
指導担当教員 鵜飼修
活動場所 彦根市石寺町
関係団体 下石寺町自治会
活動概要 下石寺集落では、空き民家を利用して学生が共同生活をしています。その民家の２階を利用して、映画を観賞するイベント「シネマ石寺」を開催し、集落の人々と学生が交流し、集まる機会を作っていきます。

チームからの活動報告

成果 - できたこと -

・上映会（シネマ石寺）は昨年の 3 月時点でできれば毎月したいと話しており、結果として計画の隔月開催以上に取り組めた
・上映会の内容も看板やスタンプカードの作成などに取り組み、来場者も増えている
・拠点スペースの床の補強工事は夏休みにメンバー全体で、また助っ人に大いに助けていただきながら夏休み明けの上映会に間に合うように完了でき、その後も不備なく使用できている

課題 - できなかったこと -

・開催のお知らせや開催時間の調整などについて、計画的にチラシの作成や振り返りを行うことができないことがあった
・床板の塗装などのさらなる整備ができなかった
・意見交換会への参加や年度末の総括などはメンバーの都合がつかずきちんとできていない

活動を振り返って

県大生と集落の持続的な関係の構築を目指すきっかけになろうと、「キネ・コモン石寺」ではコミュニケーション・スペースとしてシネマ石寺の会場を整備し、住民との交流の場を形成し、学生と集落住民との交流・連携を強め、持続的な活動へとつなげることをプロジェクトの目的としました。大勢で見るシネマは家で見るのとは一味違って、企画の時の工夫しがいも大いにあります。作ったポップコーンを喜んでいただいたときは、私たちも嬉しかったです。鑑賞会のあとにありがとう、面白かったよ、またよせてもらいますなどと声をかけていただいたり、お菓子やケーキなどを持ってきて下さる方もいて、それぞれ楽しんでいただけてるのではないでしょうか。

4 月からもこれまでに引き続き DVD 上映会「シネマ石寺」他事業に取り組んでいきます。これらにより認知度が高まれば、拠点性が向上しコミュニティ・スペースの創造につながると考えます。そしてその運営を通じて学生と集落住民と良好な関係が構築され、次年度以降への継続性の創造につながると考えます。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	①⑥改修作業で工務店の方から技術を教わり、実際に活かすことができた。改修作業やチラシの作成に初めて取り組むメンバーにとっては基本的な技術に触れることができた。またそこから人的ネットワーク、つながりができた。
②交渉力・コミュニケーション能力		
③計画力・スケジュール管理能力		④上映会やワークショップを企画するにあたり、実際のモノの作成やワークショップでの改修作業、話し合いの時の進行などそれぞれが得意とすることをうまく組み合わせてプロデュースできた。
④企画・プロデュース力	✓	
⑤問題解決力	✓	③⑤上映会を実際にしてみると問題は出てくるので、それらに取り組めた。企画・運営やメンバー間の連絡などに取り組めた
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	
⑦学内での新たな出会い・交流	✓	⑦近江楽座の企画に参加したり、実際にホストをすることで他のプロジェクトと交流する機会となった。上映会に参加してくれた学生もいた。
⑧その他		

成果物／制作物

楽座新聞

上映会チラシ

総括

指導教員から　環境科学部　鵜飼修

古民家を活用した交流スペースづくりは各地でその効果が認識されつつあります。

今回の「キネコモン石寺」の取り組みは、学生居住の古民家の 2 階の小屋組の見える空間を「シネマ」として活用したことに特徴があります。そして、もともとは学生達の交流の場であった「シネマ」が、集落の方々に知っていただき、集落のイベントの 1 つとして定着しつつあることは、素晴らしい成果だと思います。

これは集落住民を対象としたアンケート調査の結果において、私の取り組んでいる特別研究（エコ民家における CO2 排出抑制の取り組み）の項目よりもダントツで認知度が高かったことに現れています。

成果報告会で集落の方からコメントいただいたように、集落へ学生がかかわってくれることを集落の皆さんは本当に期待し、また喜んでいます。しかし、期待されると言うことは同時に責任も生じると言うことです。適切な組織運営体制を構築し、常に自分自身も楽しみつつ、集落の方々や他のメンバーの思いも叶えながら、継続的にな取り組みに展開していくことを期待します。

19 Ohmi Food Project

チーム名 Ohmi Food Project
代表者 築山恵子
代表者所属 人間文化学部
メンバー数 65 人 （うち学生コアメンバー５人）
指導担当教員 灘本知憲、福井富穂、浦部貴美子
活動場所 滋賀県内
関係団体 -
活動概要 昨年まで近江牛バーガーを販売することによって、地域と交流をしてきました。今年度は、ふなずしや果物の酵母を利用した商品の開発を始め、より多くの人々の「食」や「健康」に対する関心を高めていきます。

チームからの活動報告

活動を振り返って

今年は滋賀県産のふなずしやフルーツ酵母の試作を主に力を入れ、地産地消を心がけていたため、地域の人とのふれあいが少なかった。今後は試作だけではなく、地域の人とのふれあいももっと積極的に行っていく必要がある。そして、来年度には、今年度では完成できなかったふなずしパン、フルーツ酵母のお菓子の試作をもっと繰りかえし、より完成度の高い商品を作れるようにする。とくに、ふなずしパンは滋賀県の伝統食であるふなずしをりようしているため、来年、再来年と試作を行い、Ohmi Food Project の近江牛バーガーに続く商品になるようにしたい。

１１月より始めてきたお勉強教室は、今年度の到達目標として Ohmi Food Project とのリンクを考えてきた。しかし実際のところお勉強教室の参加人数が１～３人という少人数であったので、機能として弱く、リンクを断念せざるをえなかった。最近になってようやく人数が増え始めたので、来年度に期待したい。

米原市の甲津原地での活動は、日程が合わず１回しか訪問できていない。訪問したときには、甲津原地域での食文化にふれ、地域に残る伝統食の伝承の大切さを感じた。そのため、今後定期的に訪問できるようにしたい。また、彦根育成会のクリスマス会のお弁当のアイデアを考えることはできたが、実際に利用してもらうことができなかった。これは、当日の日程が合っていれば、Ohmi Food Project でお弁当を作ることができたのではないかと思う。

今年度は、先生からの紹介、提案によって活動の幅が広がってきたので、来年度以降、今年度かかわりのあった方たちと、連絡をとることで、より活動の幅が広がると思う。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術		
②交渉力・コミュニケーション能力		
③計画力・スケジュール管理能力		
④企画・プロデュース力		
⑤問題解決力		
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	⑥いこう館でのお勉強教室では、地域の小学生との交流ができた。また、橋本商店街の方とのネットワークを持つことができた
⑦学内での新たな出会い・交流		
⑧その他		

成果物／制作物

楽座新聞

総括

指導教員から　人間文化学部　福井富穂

それぞれの事業において、地域住民の方々との連携がとれ、有意義であった。教員からの紹介や提案により活動してきたが、今後は学生が主体的に活動することにより、幅を広げることができる。

近江楽座活動年度　H16　H17　H18　**H19**　**H20**

19

20 近江楽座を全国区へ

チーム名　近江楽座売り込み隊
代表者　濱田智章、辻雅人
代表者所属　環境科学部
メンバー数　37 人 （うち学生コアメンバー２人）
指導担当教員　近藤隆二郎
活動場所　学内、滋賀県内
関係団体　-
活動概要　「近江楽座売り込み隊」は、その名の通り近江楽座を売り込んでいくために活動します。対象は県大？彦根市？滋賀県？いえいえ、狙うは全国。各楽座プロジェクトと協力して近江楽座を全国に普及させます。

チームからの活動報告

成果 - できたこと -

全国的に知名度の高いマラソン大会の場で、近江楽座の活動を紹介しつつ、環境啓発活動を行うことができた。より多くの人にブースに来てもらえるような工夫として、スタンプラリーや景品を用意できたことは、効果のあることだったと思う。それによって当日の天気が悪かったにも関わらず、用意したワークブックと景品はほぼ配りきることができるぐらいの、多くの人に参加してもらい、楽しんでもらえたと感じている。

課題 - できなかったこと -

近江楽座の全チームに参加を呼びかけたが、思うように集まらなかった。呼びかける時期が遅かったことや、年度末の忙しい時期とかぶってしまったことなどが原因であると思う。それによって、当初思い描いていたブースの内容とは異なるものになってしまったと感じている。また、当日用意しなければならなかった備品の不足や、スケジュールを立てつつ計画的にイベントを構成していくという点で、課題が残ったのではないかと考える。

活動を振り返って

１年間の半分以上が活動していないので、良かったとは言えないです。しかし、「近江楽座　テント村」に関していえばまずまずの成果があげれたのではないかと考えています。今回のイベントは私たち近江楽座売り込み隊と他にもいくつかの楽座チームが協力してくださり、あまり知られていない滋賀県の南部や京都方面の人たちに近江楽座のＰＲをすることができました。また、毎日新聞社さんの協力により事前や事後の広報も充実させることができました。
ただ反省点として、対象者を子どもと限定してしまったので一部の大人は楽しめないものになってしまったということです。

今後はもっと多くの楽座チームを巻き込んだイベントや活動をおこしていくべきだと考えます。もちろん、楽座チーム同士だけでなく楽座チームと他団体との繋がりをもっと大事にしていきたいです。

最後に、協力していただいた楽座チームの皆様、毎日新聞社様、協力していただきありがとうございました。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術		② テント村開催にあたり、他の楽座団体に参加を打診した際、いかに快く参加してくれるのかということを考えていくうちに、よりよい内容のお誘い文章を個別に考えるというスキルが身についたように思う。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	
③計画力・スケジュール管理能力	✓	
④企画・プロデュース力		③ スケジュール管理はほとんどできていなかったが、計画力という点では、前年のイベントを参考としてよりよいものにすにはどうすればいいかということを、昨年の関係者の方々に聞くことで、良い計画がたてられたと思っている。
⑤問題解決力		
⑥地域の方との人的ネットワーク		
⑦学内での新たな出会い・交流		
⑧その他		

成果物／制作物

近江楽座
売り込み隊新聞

活動報告

2010年3月7日に、売り込み隊として初めての活動である「近江楽座 テント村」を催しました。開催場所は大津市皇子山陸上競技場で、第65回琵琶湖毎日マラソンと連携して行いました。
当日の天候は雨・・・しかし、それにもかかわらずたくさんの人たちにブースで楽しんでもらえました。また、ステージにて楽座の日常活動・「近江楽座」ロゴのエコバッグ・楽座のフライヤー配布もしました。

近江楽座　テント村

近江楽座テント村には、［ななちょ］［一世］［廃棄物バスターズ］［葉の花エネルギー］［未来看護塾］の5団体と私たち売り込み隊の合計6団体がブースを出しました。また、［音彩］は当日参加はできなかったのですが、会場の装飾等で協力していただきました。

当日は、ブース出展した6団体がしていることや特徴を活かした内容のブースにし、私たちは、すべてのブースを回ってもらえるような工夫としてスタンプラリーをしました。
ななちょは紙芝居の塗り絵・一世は南持野菜の野菜を使ったけんちん汁の販売・廃棄物バスターズは環境すごろくの展示と環境クイズ・葉の花エネルギーはバイオディーゼル力一の展示と手のひら発電体験・未来看護塾はちびっ子広場をしました。

発行者
近江楽座売り込み隊
発効日
2010年3月31日

近江楽座売り込み隊とは
近江楽座の活動を一部の人たちだけでなく滋賀県内や全国の人にも知ってもらうことを目的としている団体。

紙芝居の塗り絵（ななちょ）　未来看護塾の「ちびっ子広場」　イベント会場

会場の声

課題

プロジェクトの目標

楽座新聞

イベント
スタンプラリー

総括

指導教員から　環境科学部　近藤隆二郎

売り込み隊は、最初のチームが頓挫して投げ出してしまうという前代未聞の経緯をとり、その後を受けた新チームが引き継いでやりきりました。当初チームによる申請時の内容とかなり変化したことは、申請内容にあったように学科 OB である広告代理店勤務者との検討会議の中で、売り込む軸があれこれとぶれてしまったことにも原因がありました。OB によって意見等が異なってしまったことと、この売り込み隊は、個別地域の独自の取り組みというよりは、楽座全体をプロモーションするという、なかなかに相手先が見えにくい活動であったことにもやりにくい原因があると思います。そのあたりは、指導教員としての誘導がうまくなかったと責任を感じています。

その一方で、新チームが担当したびわ湖毎日マラソンにおける近江楽座「村」は、急な取り組みであったにもかかわらず、全チームへの呼びかけ、そして呼応したチームへの対応、毎日新聞社や楽座事務局とのやりとりといった点で、成し遂げたことはすばらしいことと思います。天気が今ひとつだったこともありますが、来年も是非と言われています。同じ時空間で出し物をするという協働体験は各チーム間のつながりを出すこととしても意味があったのではないでしょうか。

もう少し、「ほうれんそう」と綿密な打ち合わせができれば、不要な心配が無くなり、より良いものになったのではと思います。ご苦労様でした。

近江楽座活動年度　H16　H17　H18　H19　H20　20

21 近江中山道 百彩プロジェクト

チーム名 百彩
代表者 安食陽子
代表者所属 環境科学部
メンバー数 15 人 （うち学生コアメンバー５人）
指導担当教員 近藤隆二郎
活動場所 彦根市高宮町、鳥居本町
関係団体 近江中山道を楽しむ会
活動概要 家にある赤いものを軒先に飾り、街並みを赤で彩る「百彩」。地域の方の間に「自分達のイベント」という意識が芽生えつつあり、「飾る」ことを通して地域や歴史について知り、見直す機会をつくります。

チームからの活動報告

活動を振り返って

地域に対しての活動

地域に対しては、昨年までと同等の活動であったのではと感じる。継続プロジェクトとして、発展させていくべきであるとも思うが、私たちとしては「百彩」を地域の方がもっと盛り上げていって欲しいという思いがあった。その点からみたとき、どうだったのだろうかとは感じる。また、実験的に違う色の飾り付けを行ったことについては、様々な可能性を街並みの飾り付けから見出すことが出来ないかと考えた。高宮の「百彩」に少しでも何かきっかけを与えることが出来たなら幸いである。

鳥居本については、昨年は分からないが今年はかなり地域主体で動いていた。趣旨等は初期の高宮のものとは少し違っていた。しかし地域の方の手で自分たちのイベントとして動いていくのならそれもひとつの形であると思うし、鳥居本独自の「百彩」が続いていけばおもしろいと思う。

また、ステップアッププログラムとして、5 年間の「百彩」のまとめイベントを開催した。報告書提出段階ではまだイベントが完了していないためそのイベントについての振り返りは出来ない。しかし今までのまとめとしてイベントを開催することで、ひとつの区切りになったと思われる。

プロジェクトとしての活動

今年度、近江中山道百彩プロジェクトは、「百彩」「風彩」などの景観形成イベント、まるエコ DAY などへのブースの出展、まとめイベントの開催、と大きく分けて３つの活動があった。

プロジェクトとしては、どういった立ち位置のものであるのかについて考えることが少なくなかった。「百彩」などのイベントについては、飾りを行うのは地域の方であり、私たち学生はそれを促すポジションであった。ブース出展についても、「百彩」をブース出展により広めることが、結果として地域に何か返るのかという点について考えたとき、多少疑問が残った。ブースの出展によって得られた経験などを、もっと地域に還元できるようにする必要があったと思われる。まとめイベントについては、地域の方にきちんと活動の意味を伝える意味でも重要なものだと思う。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術		②地域の方に飾り付けなどを依頼することで、コミュニケーション能力を身につけることができた。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	
③計画力・スケジュール管理能力		
④企画・プロデュース力		
⑤問題解決力		
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	⑥当日のイベント等を通し、多くの方と知り合うことができた。
⑦学内での新たな出会い・交流		
⑧その他		

成果物／制作物

近江中山道百彩プロジェクト　10.03.31

特徴の見られる「百彩」

赤以外の「百彩」？

色の濃いと地域の方の印象

今後の展望

後期の活動報告

楽座新聞

うちわ

イベントDM

総括

指導教員から　環境科学部　近藤隆二郎

5年目を迎えた百彩を無事に実施できたことはとても良かったです。風彩という取り組みもあらたな連携として萌芽がありました。この取り組み自体は長く続けているので、地域側の体制も関係者がしっかりしていて、あまり無理なくできるようにはなっています。また、学生もシンプルなイベントだけに興味をもって参加してくれます。が、どうにもチームとしてできにくいのが難点です。逆に言えば、孤軍奮闘でひっぱってきたことは大変であったでしょう。ただ、どうしても直前の動きになってしまい、広報などが後手後手になったのは、長年している割には残念でした。もったいなかったと思います。地域との関係も、今回も百彩ありきであって、長年続けているゆえの惰性も双方にあったように思います。

また、高宮宿だけでなく、隣の鳥居本宿でも百彩がおこなわれるようになり、逆に鳥居本の方が地域主催となっていることは、感慨深いものがあります。いずれにせよ、色彩参画という百彩の手法はある一定のステップを担ってきたかなと思います。

0328の高宮報告会（近藤研主催）で5年間を振り返るとともに、今後のバトンを地域側に投げようとしていますが、どうなるのか、何かを残せたのかはそこからだと思っています。

22 Taga-Town-Project

チーム名 Taga-Town-Project
代表者 吉村紗央里
代表者所属 環境科学部
メンバー数 28 人 （うち学生コアメンバー 13 人）
指導担当教員 松岡拓公雄、山根周
活動場所 犬上郡多賀町
関係団体 商工会、門前町共栄会、多賀区
活動概要 私たちは、多賀町をフィールドに、まちが抱える課題やニーズについて地域とともに考え、取り組んでいます。ハード面からソフト面まで幅広く活動し、多賀が元気で個性あるまちとなることを目指します。

チームからの活動報告

成果 - できたこと -

万灯祭ではまちと協議した後は、スムーズに計画を進めることが出来た。インタビューは計画通り 3 人行えた。てぷ便りでは自分達の活動を発信をとしてまとめ、発行できた。

課題 - できなかったこと -

万灯祭ではまちの人との協議の日程調整がうまくいかず、計画全体が遅れ気味になった。こちらの提案とまちの意向を合わせるのにも時間がかかったことも原因である。インタビューの編集に時間がかかり発行は予定通りできなかった。拠点作りは、まち側との調整や具体的な使い方を計画できなかったため断念した。ホームページは一応つくったものの更新する人がいないことや、ブログでの報告がメインになったため進めなかった。

活動を振り返って

今年度は、特に前期のプロジェクトがうまくいなかった。具体的には、万灯祭において活動のコンセプトが変わったことや、てぷだよりにおいて、配布の計画があいまいでうまく活用できなかったことなどが挙げられる。これらは、「毎年度取り組んでいるから」というような、目的意識を欠いた姿勢が原因であった。

後期は、このことを踏まえ、まず TTP として『多賀の魅力を伝え、「ずっと住みたいまち」をめざす』という目的を設定した。その結果、各プロジェクトは見直され、「Wild cook project」と「色人図鑑」という 2 つのプロジェクトを中心に進めることとなった。現在、2 つのプロジェクトは実際に多賀で取り組みつつ、企画を見直しながら進めている。他にもできるだけ多賀町へ行って実際に活動することや、活動の記録をこまめにとること、自分たちの活動を、多賀町の方に対して定期的に発信するなどの改善が得られた。

前述した今年度の失敗の認識・失敗の原因の分析などは、中心メンバー以外の上回生や OB、ファシリテーターの方などとの対話や批判で明らかになった。そして、今後も活動をより良くするために有効である。

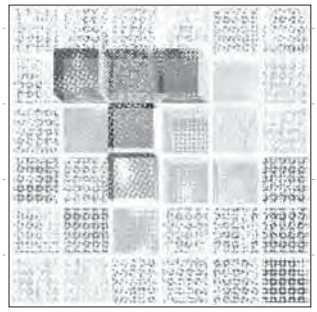
スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	②「色人だより」におけるインタビューや多賀にお住まいの方と忘年会などで、多賀にお住まいの方と直接話す機会を多く経たことで、大学関係者以外の方との対話のコミュニケーションの能力が向上した。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	
③計画力・スケジュール管理能力		⑤メンバー内での情報共有ができていないなど問題に対して、まずミーティングで議題にすることによってメンバー内での「問題の共有をするシステム」ができた。また、問題の原因に対して、議事のルールの制定など、ミーティングを通して「具体的で組織的な解決案」を考えることができた。
④企画・プロデュース力	✓	
⑤問題解決力	✓	
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	⑥「色人だより」においてインタビューを行ったり、春の古例大祭の主体の１つである「柏の会」に学生が参加したこと、地域のお祭りや行事（「多賀ふるさとふれあい祭り」や、「万灯祭」）に参加することによって新しい人的ネットサークを築けた。
⑦学内での新たな出会い・交流	✓	
⑧その他		

成果物／制作物

楽座新聞

色人だより



活動紹介
パンフ

総括

指導教員から　環境科学部　松岡拓公雄

「不易流行」。近江楽座の看板プロジェクトになっている TTP も毎年恒例の伝統行事への参加は定着してきているようだ。いわゆる定番になりつつあり、今後も活動は続けることに意味があるが、一方でマンネリ化して単なるお手伝い参加だけに陥る危険がある。そうならないように同じ活動の中でも変化球が必要だ。

今年度は多賀の町を活気づけようと、人物探査や町中探検的な新たな切り口で多賀を見直し、その発見過程での交流もまた新たな回路をつなげて行き町が息づくことになるであろう現在の活動は評価したい。学生はメンバーが交代して行くので、学生にとってはいつも新鮮な気持ちで呼応していけるが、町の人は同じ顔ぶれである。ただ人も町も歳をとっていくように、スパンのある時間をテーマに新たな展開ができるかもしれない。

23 いかして民家？

チーム名 古民家楽座
代表者 飯田陽平
代表者所属 人間文化学部
メンバー数 16 人 （うち学生コアメンバー 11 人）
指導担当教員 濱崎一志、石川慎治
活動場所 彦根市、多賀町、長浜市、滋賀県内
関係団体 NPO 彦根景観フォーラム
活動概要 私たちは、彦根市、多賀町、長浜市などの湖北・湖東地域を中心に、古民家などの伝統的建造物の実測調査や、再評価を行い、それらを活用することによって地域活性化を図っていきます。

チームからの活動報告

活動を振り返って

活動を振り返って

多賀一圓邸では、地元の有志の方が月２回定例会を開いて、野菜市や蕎麦打ち体験をしており、イベントに参加し、今後の活用のあり方を地域住民とともに探った。

昨年度の調査では平面図と座敷断面図は作成できていたが、土間断面は作成できていなかった。作成にあたり、今年度は天井を撤去し整備する作業を行った。また、定例会に参加されている地元の方にも天井へと上がってもらう公開イベントを実施した。

７月から彦根市の花しょうぶどおりに並ぶ町家の実測調査を行っており、現在も調査を続けている。花しょうぶ通りは現在、伝統的建造物群保存地区への申請を目指しており、地元自治会や商店外の方々の協力を得て行っている。かつて郵便局であった高崎邸の実測調査と公開イベントを同時に行い、地元の方へ活動の理解を深めていただいた。

12 月には東近江市にある五個荘町の伝建地区である金堂で、地域の小学生と一緒にまち探検を行った。まち探検は、子供達に町の特徴、良さを知ってもらおうと、金堂まちなみ保存会の方が毎年行っておられるもので、我々の参加も４回目となる。探検後は餅つきや、印象に残った物を紙芝居風にして小学生に発表をしてもらい、歴史ある町並みに愛着を持ってもらった。

活動を通しての課題

まず私たちの活動は民家一軒一軒の単位になってしまうので、活動がまち全体へと普及しにくい。また古民家再生、という活動は最近よく聞くが、実際に活動の中身を知ってもらう機会がなかなかないのが現状である。　そして何より地域住民の理解・関心が大切であり、コミュニケーションが今以上に必要だと感じる。

今後の目標

望ましい形としましては、現段階ではどうしてもまだ学生主導という形が大きいので、学生と地域住民の手によって古民家の保存・活用を行っていく、ということが大事である。

そして最終的には地域住民の手による、地域活性化が行われていくことが理想であり、学生はその架け橋、地域の魅力を伝える担い手になるような形に持っていくことが目標である。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	①調査により、実測のテクニックを磨いた。まち探検イベントでは、地元の方との事前打ち合わせに参加することで、今まで知らなかった知識や、地域活性化のスキルを学んだ。
②交渉力・コミュニケーション能力		
③計画力・スケジュール管理能力		
④企画・プロデュース力	✓	④龍谷大学でのシンポジウム、他大学との交流を通じて、他社に向けて発信する力を身につけれた。
⑤問題解決力		
⑥地域の方との人的ネットワーク		
⑦学内での新たな出会い・交流	✓	⑦花しょうぶ通りの調査を通じて、他の研究室との交流ができた。
⑧その他		

成果物／制作物

KOMINKA TIMES

多賀一圓邸公開！

ツシ二階に人々驚嘆

さよなら、天井

一圓邸のそば打ち

金堂のまちなみを探検

子供たちの笑顔はじける

古民家使り

地元住民の声より

今年度の活動成果

花しょうぶ通り再発見

高崎邸

今後の課題

今後の目標

一年の活動を通して

楽座新聞

総括

指導教員から　人間文化学部　濱崎一志

今年の活動は立ち上がりが遅れたが、五箇荘まちなみ探検に協力し、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている金堂地区の良さを子ども達に理解してもらう上で大きな役割を果たした。

多賀一圓邸ではこれまで後補の天井により土間の上部に上がることができなかった。実測図も作成できない状態であった。天井の一部を協力して撤去し、実測調査の条件を整えるとともに公開イベントでは厨子二階の上まで参加者に上がってもらい、一圓邸の大空間を体感してもらうことができた。

こうした活動は古民家の良さを地元の人々に理解してもらう上で大きく貢献したが、活動の立ち上がりが遅れたことは達成率の低下を招いた。来年以降は改善する必要がある。

24 自然環境伝播計画

チーム名 エコキャンパスプロジェクト
代表者 柳沼勇多
代表者所属 環境科学部
メンバー数 54 人 （うち学生コアメンバー 20 人）
指導担当教員 野間直彦、黒田末壽
活動場所 学内
関係団体 犬上川を豊かにする会
活動概要 荒れた竹林の問題を提唱してきた「犬上川竹林プロジェクト」と学内の自然環境を広めてきた「人と自然をつなげる会」がタッグを組み、学内周辺環境の問題や現状について情報提供やイベントを行います。

チームからの活動報告

活動を振り返って

私たちエコキャンパスプロジェクトが申請時に掲げた目標は、1）大学周辺の自然環境の把握、2）その改善、3）活動の発信である。1）では鳥類調査・昆虫調査などの調査活動と環濠プロジェクトで、昆虫調査では昨年度までライトトラップ中心だった調査から、今年度は糖蜜採集調査を中心にした活動とした。この結果、学内と犬上川では植生が異なるため、生息しているキリガの種類も異なることが示唆された。また鳥類調査の結果から、犬上川では河川改修工事が鳥類に与える悪影響はみられませんなかった。一方で、その他の継続調査や環濠プロジェクトはほとんど実施しておらず、十分に目標を達成することはできなかった。
2）については、前年度に引き続き犬上川河辺林の林内整備、芹川に侵入した外来水草のナガエツルノゲイトウの駆除などをおこなったほか、今年度初めて湖風祭前後にゴミも行った。これらのうち、ゴミ拾いでは事前に事務局と湖風祭実行委員に呼びかけ、学生や事務職員を巻き込んだ活動にすることができた。これら2) に関しては十分に目標を達成することがでした。
3) 長浜バイオ大学の学園祭や彦根市社会福祉協議会主催の「知る (シル) 場 (バ)ー(ー) 学祭」、湖風祭で竹箸作りのブースを出店し、エコキャンの活動をアピールした。しかし、活動の拠点である大学内の発信活動は湖風祭でしかおこなえず、特に大学の自然環境を生かした自発的な発信があまりできなかった。

活動計画とは別に、今年度はステップアッププログラムのファシリテーターを県立大学の OB である佐々木さんに依頼し、エコキャンのビジョンの見直しをおこなった後に、今あるプロジェクトとは別に 5 つのプロジェクト案（①魚道の整備②景観と生物に配慮した草刈りの模索③北駐車場照明改善④環濠ネット改善 5 生物の棲みよい環境の模索）を立ち上げた。うち③④のは学内環境改善の方策として事務局施設管理担当に提言するに至った。ほかの案に関しても今後活動を開始していく予定である。

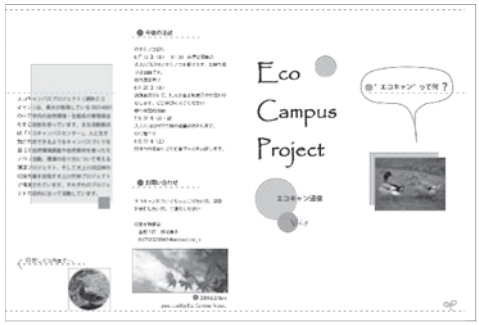
地域と積極的に関わって活動できなかった点も反省点である。今後の活動案として、学内に生き物の名前が分かる看板の設置、休日に学生や学外の方を招いて観察会をおこなうなど、大学内の自然環境を活かした活動を通して、地域への情報発信や関係づくりをおこないたいと考えている。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	①チーム内で、外来種の勉強会を行うことで外来生物についての知識が深まった。全国竹の大会に出席し、竹林整備の現状や他団体が行っている管理方法などを学んだ。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	
③計画力・スケジュール管理能力		②ステップアッププログラムで実際のファシリテーターの姿を見たことや、ファーマーズミーティングに参加することで、ファシリテーション能力、議論をまとめる力が身についた。
④企画・プロデュース力	✓	
⑤問題解決力		④炭づくり等の毎年行っているイベントに加え、ゴミ拾い等の新しいイベントも行い、企画や集客、告知の難しさを学び、また、企画に協力してくれる団体があることが大変ありがたいことであることを学んだ。
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	
⑦学内での新たな出会い・交流		⑥「知る場ー学祭」で地元の高齢者と交流し、竹林の現状と以前の竹の使用状況についてお話をすることができた。竹林プロジェクトの整備活動では彦根市役所の方や地元の方と一緒に活動する機会が増えた。
⑧その他		

成果物／制作物

楽座新聞



活動紹介パンフレット

総括

指導教員から　環境科学部　野間直彦

昨年度までの調査で明らかにしたことを元に、問題点を改善することを目指したが、計画は遠く達成できなかった。調査の蓄積（「把握」）はかなり多く、行動する時に移っていると認識していたが、学生の多くは何をしたらよいのかわからない状態であった。その一因は、過去の成果が、個々のプロジェクトに参加していない学生・新しく参加してきた学生に共有されていないことにあった。メンバー間のコミュニケーション不足、イベント的な活動以外での活動の不足が響いたと考えられる。

ステップアッププログラムで、佐々木さんの周到な解析により、問題点の多くはメンバー間で共有され、動き出す体制づくりができたと評価できる。しかし、新しい成果をあげるには年度内の残り時間は短かった。討論会のような日常の活動の充実が、「改善」の実際やイベント的活動時の「発信」に力をもつと考えられるので、今後結実することを期待する。

近江楽座活動年度　H16　H17　H18　H19　H20　24

25 おうみの豊かな暮らしかた広報プロジェクト

チーム名 dat lab
代表者 野口香織
代表者所属 人間文化学研究科
メンバー数 14 人 （うち学生コアメンバー 6 人）
指導担当教員 印南比呂志
活動場所 滋賀県内
関係団体 -
活動概要 ”滋賀ならではの日々の暮らしの一片 ” を紹介することをコンセプトに、恵まれた環境の中で暮らす人たちの日常生活を取材し、将来的に滋賀県への移住促進のための情報発信減となることを目指します。

チームからの活動報告

成果 - できたこと -

チームメンバー全員が取材に赴き、地域の方々と触れ合えた点、また取材のみにとどまらず料理教室等へも積極的に参加し、楽しみながら取材を行なえた点が良かった。会議を行なわない時期も、メーリングやブログ、Web 上ミーティング等で全員が情報を交換しあっていたので、個々が今すべき仕事を確認しやすく、作業、会議がスムーズに行なえた。

課題 - できなかったこと -

全体を通して、スケジュールの立て方に問題があった。取材、撮影など、実際の作業までに必要な点が多く、編集作業に費やす時間が読めていなかった。また、納入分と市販分でわけたという点で、進捗具合に差がでてしまった。また、今後の大きな課題として、チームメンバーの編集技術、DTP 知識にばらつきがあったことが挙げられる。実際にデータ制作に移る前に、スキルアップ講習会や勉強会などを通して最低限の知識は身につける必要があったように思う。

活動を振り返って

県からの委託に沿う形で、もっと滋賀県での暮らしがリアルに感じられる雑誌、データではなく、写真やテキストやコラム等で滋賀に暮らすことの魅力が伝わる雑誌を作ろうという意見がおこり、活動を進めた。初めての雑誌編集ということもあり、スケジュール管理や編集作業等各方面でミスも多かった。しかし、快く取材を引き受けて下さった地域の方々や、編集初心者の私達に指導下さった方々のご協力もあり、全体として非常にやりがいのあるものだったと思う。また取材を通して、多くの方と知り合えたこと、地域の輪に入れていただいたことは当初からは想像もできない貴重な経験となった。

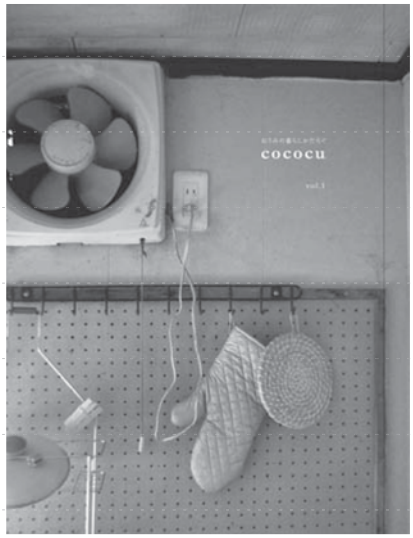
今回の第一号だけで、かなり魅力のある方々とその暮らしを取材できた。そう考えると、滋賀県にはもっと取材対象があると思う。cococu は今回の一冊にとどまらず、二号、三号と続くものであってほしい。そのためには、内容の選定や反省点として残った進め方、メンバー探しも重要であるが、第一号売り込みや購入者の声を聞く、と言った事を責任をもって続けていき、次号発刊の動力としたいと思う。

スキルアップ - 新たに得たこと -（一部抜粋）

項目		チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	✓	①グラフィックデザイン事務所に勤める井上洋一さんを講師とし、画像のデータ処理や、入稿データ作りに置けるレイアウトソフトの留意点等を教わった。
②交渉力・コミュニケーション能力	✓	
③計画力・スケジュール管理能力		②取材先へのアポイントや、事前の説明等すべて自分たちでおこなったので流れを習得することができた。
④企画・プロデュース力	✓	
⑤問題解決力	✓	④雑誌のコンテンツをメンバーで出し合い会議を繰り返して練り上げていった。地域の魅力を引き出す独自の視点が身に付いたと思う。
⑥地域の方との人的ネットワーク	✓	
⑦学内での新たな出会い・交流		⑥県内全域を対象として取材を行ったので、広い範囲の方と知り合うことができた。
⑧その他		

成果物／制作物

楽座新聞



広報誌　cococu

総括

指導教員から　人間文化学部　印南比呂志

今回の広報プロジェクトは、滋賀に暮らす様々な人々の人間模様を描き出す作業だった。一冊の雑誌が出来上がるまでの道のりは、編集方針をしっかりと理解し合える多くの人間の協力と専門知識とスキルが必要だった。取材や執筆、写真撮影、デザインレイアウト、データ作成、予算管理などを能力に応じて分担しながらも、全体を把握して進行管理できる人材がヘッドとなって編集作業は進んでいくものだ。

近江楽座の B プロジェクトはいわゆるコンサル、シンクタンク機能を目標にした活動を学生や教員を中心に教育、研究の視点で進めているため、プロ的な組織構成での編集作業は難しかったが、情熱のある学生たちや OB, OG の協力により完成度の高い雑誌が出来上がった。今回のプロジェクトは県に成果物を納品して終わりというものではない。自分たちが作り上げたこの雑誌の販売や次号への展開を目指している。B プロジェクトによって産声を上げたこの雑誌を育てていきたい。

近江楽座活動年度　H16　H17　H18　H19　H20　25

2-2　共通プログラムの報告

2-2-1　中間報告

近江楽座中間報告イベント
まちづくりファーマーズミーティング

実施目的

■ Part1　中間報告会
各チームが前半の活動を振り返り、チーム間での情報交換、教員からのアドバイスを通じて活動のブラッシュアップと後半への活動のステップアップを図る。加えて、地域の方に見ていただいたり、学内外への情報発信を行う。
■ Part 2　まちづくり　ファーマーズ　ワークショップ
学生、教職員、地域関係者が同じテーブルでワークショップを行うことを通じて、学生のコミュニケーションスキルの向上とネットワークのきっかけづくりをめざす。

実施概要

■日時：平成 21 年 11 月 14 日（土）
　　11：00 ～ 17：00
■場所：滋賀県立大学　講義室 A2-202,
　　交流センターホワイエ・研修室 1-3

実施内容

■ Part1　中間報告会　11：00 ～ 13：00
・来場者数 78 名（学生・教員・一般）
・代表して 8 チームが活動成果発表
　男鬼楽座、廃棄物バスターズ、Taga-Town-Project、守山宿だるまそばプロジェクト、DIG’S、あかりんちゅ、エコキャンパスプロジェクト、 dat lab
・当日企画として下記を開催
　▶すべてのチームの活動を紹介する
　　「らくざしんぶん」を発行
　▶意見交換、指導助言
　▶ゲスト発表
　　（福井県立大学生物資源学部・広石伸互教授）
　▶ブース出展（7 ブース）、パネル展示
　▶「らくざしんぶん」展示、近江環人展示
　※当日は、交流センターホールにて滋賀銀行主催のサタデー起業塾が開催されていたこともあり、参加者（企業関係者）に近江楽座の活動をアピールした。

■ Part 2　まちづくり　ファーマーズ　ワークショップ
　14：30 ～ 17：00
・参加者 60 名（学生・教員・一般）
・参加型ワークショップの開催
「学生と地域のコミュニケーション・スキル講座
地域の課題解決に向けての議論の進め方と効果的な運営のためのファシリテーション技術を学ぶ」
　講師：株式会社エンパブリック　広石拓司さん
　< プロフィール >
　1968 年大阪市生まれ。東京大学薬学系修士課程終了後、三和総合研究所（現 三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング）入社。97 年、ED!SON（市民生活室）を立ち上げ、市民参加の社会デザイン、企業と顧客のコミュニケーション事業の開発に取り組む。 01 年より、NPO 法人 ETIC. に参画し、社会起業家の育成に取り組む。主宰する「社会起業家事業開発ワークショップ」の受講生は全国 18 地域、1500 名を超える。NPO 法人 ETIC. シニア・フェロー、NPO 法人えがおつなげて理事（都市農村交流コーディネーター育成）、東北大学大学院環境科学研究科人材養成ユニット非常勤講師、慶応義塾大学総合政策学部非常勤講師（社会起業プランニング、コミュニティ・インベストメント）

■ゾロゾロ会 +（交流会）
　ワークショップ後、メンバーや教員が参加して交流会を行った。

1	2	3
4	5	6
7	8	9

part1 中間報告会の様子（1-3）、ブース出展の様子（4）、「らくざしんぶん」の展示（5）part 2　まちづくりファーマーズワークショップの様子（6-8）、交流会（ゾロゾロ会）のようす（9）

2-2-2　成果報告会

近江楽座活動報告イベント
まちづくりファーマーズフェスタ

実施目的

■ Part1　近江楽座活動報告会
統一した形式で発表により活動の振り返りを行い、それに対する関係者（学生・教員・地域関係者など）間での単年度の評価をフィードバックする。
■ Part2　まちづくりファーマーズ　ディスカッション
プロジェクトの活動報告や展示、さらに外部講師からの講演を通じて、近江楽座の取組みを学内・外へ発信する。
以上の、２つのパートを学生・教員・地域関係者が集まって行い、同じ時間を共有することで、それぞれの立場での地域活動についてともに考えることを目的とする。

実施概要

■日時：平成 21 年 4 月 17 日（土）
　　9：30 ～ 18:00
■場所：滋賀県立大学
　　交流センターホール・ホワイエ
　　研修室 1-3

実施内容

■ Part1　近江楽座活動報告会　9：45 ～ 14:30
・来場者数 140 名（学生・教員・一般）
・産業・リサイクル、食・コミュニティ、
まちづくり・景観、伝承・情報発信のテーマごとに４つのグループによる分科会形式での活動報告を行った。
発表後は、まとめとしてグループ内でのディスカッションを行った。ファシリテーターを教員が担当し、来場いただいた地域のプロジェクト関係者や一般の方とも意見を交える。
その後、それぞれの分科会での発表や議論の内容をグループごとに全体発表した。また、すべてのチームの活動を紹介する「らくざしんぶん」を発行、展示も同時開催した。
■ Part2　まちづくりファーマーズ　ディスカッション
　15：15 ～ 18：30
・来場者数 140 名（学生・教員・一般）
・基調講演の開催
「地域の DNA　―足元にある宝物へのまなざし―」
　梅原真さん　梅原デザイン事務所主宰
　< プロフィール >
　1950 年高知市生まれ
　1980 年梅原デザイン事務所設立
　漁師が釣って、漁師が焼いた「鰹のたたき」や、自然そのものを美術館に見立てる「砂浜美術館」、高知県の日本一　森林率 84％から新しいビジネスをつくる「84（はちよん）プロジェクト」など、地域を舞台に多くの個性的なプロジェクトを成功させてきた。土地の風景を形成する、一次産業において、今そこにある素材に目をむけ、価値を引き出していくデザイナーである。
・パネルディスカッションの開催
「地域プロデューサー論
　　地域の価値創造に求められること」
　コーディネーター：
　印南　比呂志（滋賀県立大学　人間文化学部　教授）
　パネラー：
　梅原真さん
　冨田泰伸さん（冨田酒造）
　山田浩行さん（陶芸作家、信楽 ACT 代表）
　山形蓮さん（滋賀県立大学　近江楽座学生委員会）

■ゾロゾロ会＋（交流会）
　ワークショップ後、メンバーや教員が参加して交流会を行った。

1	2	3
4	5	6
7	8	9

会場の様子（1）、グループ発表の様子（2-5）、全体報告の様子（6）part 2　まちづくりファーマーズディスカッションの様子（7-8）、交流会（ゾロゾロ会）のようす（9）

2-2-3　ステップアッププログラム

実施目的

今年度の新たな試みとして、継続プロジェクトについて、これまでの活動実績をもとに、地域に定着する方策や活動の新たな展開、自立化をめざす取組を強化するため、ステップアッププログラムを設け、活動のフォローアップと評価、ステップアップ方策の提案等、重点的に指導・助言を行った。

支援方法

チームの活動を継続してフォローアップし、指導する【ファシリテーター派遣】と、活動の参考となる取組紹介やアドバイザー招へい等、単発的な【アドバイザー招へい・コーディネート支援】の二つのタイプを用意し、希望するチームと個別面談を行い、チームの課題や意向を踏まえた上で、適切なファシリテーターの選定やプログラムの検討等、事前コーディネートを行った。

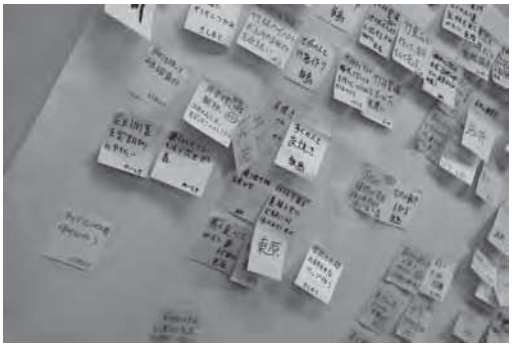
その結果、ファシリテーター派遣・4チーム（「エコキャンパスプロジェクト」、「Taga-Town-Project」、「生活デザイン専攻13期生」、「男鬼楽座」）、アドバイザー指導（活動現場見学を兼ねる）・1チーム（「とよさと快蔵プロジェクト」）が各々、プログラムに取り組んだ。

ファシリテーター、アドバイザー（敬称略）

エコキャンパスプロジェクト
　佐々木和之（水色舎・県大OB）
Taga-Town-Project
　角真央（フリーデザイナー・県大OG）
生活デザイン専攻13期生
　辻村敏之（映像作家）
男鬼楽座
　亀山芳香（大学院生）
とよさと快蔵プロジェクト
　佐野充照（町家倶楽部ネットワーク代表）

事業のまとめ

ファシリテーター派遣事業のまとめとして、プロジェクトメンバーと指導教員、ファシリテーター、事務局が参加して、ステップアッププログラムの報告会を次のとおり行った。（2月23日（生活デザイン専攻13期生）、2月24日（エコキャンパスプロジェクト、Taga-Town-Project）、3月8日（男鬼楽座））ファシリテーターの見守り・触発によって、各チームのメンバーが自分たちの活動スタイルを確認・共有したり、活動運営のマネージメントを学び、活動のモチベーションを高めることができたり、自分たちの新しい活動スタイルを見出すなど、大きな成果があったことが確認できた。



エコキャンパスプロジェクトの
ワークショップの様子

2-2-4　情報発信

（1）近江楽座ホームページの運営

滋賀県立大学における、学生の地域活動に関するポータルサイトである近江楽座ホームページの運営を行った。プロジェクトメンバーの活動において更新しやすく、また多くの人に活動の様子を見てもらえるサイトにカスタマイズするため、上半期にレイアウトとプログラムのリニューアルを行った。

＜リーニューアル内容＞

1) 各ページレイアウト変更
2) 各チーム HP・ブログとの連動プログラム構築
3) トップページ右側に、期間限定のコンテンツ追加
4) オリジナルのバナーによりリンクページを増設

それにより、情報が充実し、よりタイムリーに発信できるようななった。

（2）プロジェクトレポートの発行

事務局スタッフが、実際にプロジェクト活動現場に取材に行き、活動レポートを作成・発行した。今期は 17 号発行。取材日から発行まで 1 週間以内を基本とし、ホームページに掲載と食堂前の掲示板にも随時掲載し、ニューズレターよりもタイムリーな情報発信コンテンツとなった。

（3）活動紹介リーフレットの作成

近江楽座学生委員会のメンバーが中心となり、近江楽座に採択されたプロジェクトを写真入りで紹介するリーフレットを作成・配布した。

（4）楽座オリジナル名刺をつくろうプロジェクト

プロジェクトに参加している学生からデザインを公募し、交流会での投票により決定。決定したデザインを裏面に共通でプリントしたオリジナルデザインの名刺作成を企画した。グラフィックソフトに不慣れなプロジェクトのために、作成補助も実施。

1
2
3

近江楽座ホームページ（1）、おうみらくざプロジェクトレポート（2）活動紹介リーフレット（3）

2-3　学生委員会

2-3-1　学生委員会とは

2 活動報告

近江楽座をさらに推進していくことを目的に、プロジェクトチームの代表経験者が中心となり、2006年に結成された組織。チーム間の交流・連携を目的として毎月の定例交流会の開催や活動紹介冊子の作成等学生ならではの視点で近江楽座をサポートしている。学部や学科、プロジェクトの枠を超えた活動の輪を広げ地域活性化に貢献するためのネットワーク形成を目指している。
今年度は学生委員会を中心に、学生ならではの視点でチームの枠組みをこえた活動が自主的に展開し始めたことが大きな収穫である。

2-3-2　委員会の活動

（1）交流会（ゾロゾロ会）の企画・運営

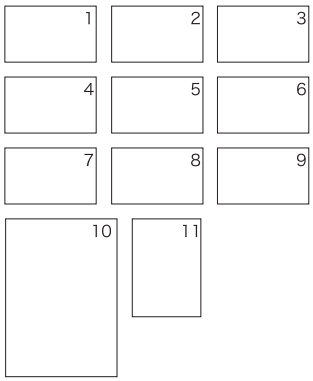
毎月ぞろ目の日に定例交流会（ゾロゾロ会、および語呂合わせの日にゴロゴロ会として）を企画・開催し、活動の盛り上げや個々のプロジェクトの横の連携を促す企画を提案した。ゾロゾロ会は8月より7回開催。1月にはゾロゾロ新年会として、プロジェクトに参加している学生のみならず、一般学生・教員・職員に広報し、50名ほどの参加を得た。ゾロゾロ会では今期より、各プロジェクトの活動現場で行うことを盛り込み、他チームの活動の様子を肌で感じることができるものとなった。
＜開催実績＞
2009年8月8日　第1回ゾロゾロ会
　突撃となりのプロジェクト
2009年9月9日　第2回ゾロゾロ会
　キノコ琵琶湖とフェルトアートの会
2009年10月10日　第3回ゾロゾロ会
　キャンドル作りワークショップと映画を楽しむ会
2009年11月14日　ゾロゾロ会プラス
　「まちづくりファーマーズミーティング」交流会
2009年12月20日　第5回ゴロゴロ会
　とよさとのビニールハウスとピザ窯と野菜
2010年1月22日　第6回ゾロゾロ会（新年会）
　おうみをあじわう日
2010年4月17日　第7回ゾロゾロ会プラス
　「まちづくりファーマーズフェスタ」交流会
※詳しくは近江楽座ホームページ参照

（2）近江楽座スチューデン隊

学生委員会メンバーを中心に“近江楽座スチューデン隊”を結成。プロジェクトが抱える問題や課題を解決するために活動を行った。具体的には、プロジェクトリーダーが情報を共有する会議“リーダーゼミ”の開催や、新入生オリエンテーション配布用のリーフレットの作成など。

（3）来年度に向けた企画

前著のリーダーゼミで、どのチームが頭を悩ます課題として上がったもに人員不足があった。それに対して、学生委員会の呼びかけで新入生向けの説明会を開催した。2日にわたって行い、両日30名ほどの新入生が参加、複数チームが自分たちの活動をプレゼンテーションした。
＜開催日＞
2010年4月12日、15日



第1回ゾロゾロ会の様子（1-3）
第５回ゾロゾロ会の様子（4-6）
第6回ゾロゾロ会の様子（7-9）
スチューデン隊作成の広報ツール・楽座map（10）、第6回ゾロゾロ会のチラシ（11）

3 今後へ向けて

おわりによせて

インタビュー

近江楽座のこれまでにみる
地域と大学、
そしてこれからへの視座

「近江楽座」の取り組みは、６年間にわたって、多くの人の手によって大切に育まれてきました。
この報告書のおわりに、「近江楽座」のはじまりと、その多くの過程を知るお二人を迎えて、大学と地域のあり方やこれからへの展開を伺いました。

奥貫隆・おくぬきたかし

滋賀県立大学地域づくり教育研究センター特任教授。1944 年生まれ。1968 年東京大学農学部（緑地計画）卒業。日本住宅公団（現・独立行政法人都市再生機構）設計部勤務をへて、1996 年滋賀県立大学環境科学部教授。2004 年は、「近江楽座」の立ち上げに尽力、その後も「近江環人」、「地元学入門」など大学と地域を結びつける数多くのプログラムを手がけてきた。

角真央・すみまお

人間文化学部印南研究室のアシスタント。1981 年生まれ。滋賀県立大学５期生。在学中は、近江楽座専門委員会の発足メンバーや「信・楽・人」の初年度代表など、学生が主体となった地域活動のリーダーを数多くつとめた。現在も、地域産業事業や街路計画事業など、デザイン・地域プロデュースの業務に携わっている。

聞き手／上川七菜

滋賀県立大学　地域づくり教育研究センター　近江楽座事務局スタッフ

近江楽座のこれまでを振り返って

上川｜ これから、近江楽座を通して、滋賀県立大学と地域の関係のこれまで、そしてこれからの可能性を探っていきたいと思います。まずはじめに、近江楽座を立ち上げた当初のことを、奥貫先生にお伺いします。

奥貫｜ 大学と地域という視点から近江楽座についてあらためて振り返ってみます。近江楽座は、平成16年の7月に文部科学省が、「現代ＧＰ」[注1)]を全国の大学に公募し、応募採択されされたことがきっかけでスタートしました。県立大学として取り組むにあたり、私たちは、地域活性化への貢献というテーマを選び、学生たちが主体的に地域に入って、そこから学ぶという教育プログラムをもとに、大学と地域の新しい関係を作り上げていくことを目指しました。学生たちの活動が地域活性化に直接的に結びつかなくても、大学の先生や学生たちが、地域の課題に関心を持ち、行動を起こすことによって、地域の人たちの大学を見る目が、変わってきますよね。学生が地域に入ることによって何らかの役割を果たすと同時に、地域の人から学ぶこともすごく多いと思うのです。大学と地域のさまざまな新しい関係を、近江楽座の取り組みを通して築き上げたいというのが基本的なねらいですね。

近江楽座のプログラムを構築する過程で、学生たちの活動状況を把握したうえでそれをどうサポートしていくのがよいか議論を重ねましたが、この部分でも県立大学らしさが発揮されました。それは、先生が前にたって学生たちを引っ張っていくのではなくて、学生自身が地域に出て行ってテーマを発見し、活動の仕方を考えて、先生たちはそれを側面からサポートするという形でした。プログラムづくりに関わった先生の想いは、近江楽座によって学生自らが考え、行動する力を育てようということで一致しました。

「人が育つ大学」という県大の教育理念が、現代GPへのチャレンジにおいても近江楽座のいちばん考え方の基本として据えられたといえます。それが「スチューデントファーム」というネーミングにも現れていると思いませんか。

上川｜ 「キャンパスは琵琶湖、テキストは人間」という、教育研究への目標もそれに沿うものですね。

奥貫｜ 県大独自のカリキュラムとして、環境科学部には環境フィールドワーク、人間文化学部には環琵琶湖文化論実習がありますが、地域に根ざした教育研究を実践する本学の看板といえる授業です。近江楽座を申請した平成16年度は、開学してから、ちょうど10年目にあたりますが、この間の教育成果が提案に活かされ、評価を受けたといっていいでしょう。文部科学省の教育改革プログラムとして大学と地域をテーマとする募集があったとき、県大こそ応募するにもっともふさわしい大学だと感じましたね。そして、見事に採択され、近江楽座がはじまったわけです。

上川｜ 角さんは実際に、近江楽座での活動をされていましたけど、初期からですか？

角｜ 近江楽座が始まった平成16年というのは私が大学院の修士課程を修了した年です。楽座に関わったのは、それからしばらくして大学に戻ってきた平成18年のことです。でも最初は学生チームの話を聞いている立場でした。私の関わり方はちょっと他の人と違っていて、まず学生委員会[注2)]の立ち上げ参加し、その次の年から「信・楽・人」というプロジェ

注1)
「現代ＧＰ」は、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の略称で、高等教育の活性化をはかる目的から時代性を背景とした教育テーマを文部科学省が提示し、それに対して各大学が申請した教育プロジェクトを選定し、財政支援を行うものである。

注2)
近江楽座をさらに推進していくことを目的に、プロジェクトチームの代表経験者が中心となり、2006年度に結成された組織。チーム間の交流・連携を目的として、学部や学科、プロジェクトの枠を超えた活動の輪を広げ、地域活性化に貢献するためのネットワーク形成を目指す。

クト[注3]の代表になってという、傍観する立場から楽座の中に入っていったような感じですね。

上川｜学生としてフィールドワークや研究室活動を体験し、一旦、大学を離れた後に、再び学生として近江楽座の活動に加わった角さん個人の経験について聞かせてください。

角｜県立大学では、環境フィールドワークの授業などがベースとなっていますが、地方の大学としての立地条件から、自分で動かないと情報が入ってこないという状況のなかで、近江楽座が始まる以前は、サークル的に地域の人と関わりながらいくつかの活動をしていました。でも、自分たちだけで活動するのは、資金的にも、モチベーション的にも限界があります。中心になって活動している学生の気力がなくなったり、卒業してしまって、終わってしまうものもあって、生えかけている芽がなかなか育たない。地域の人との信頼関係を築くのも難しいところがありました。その点、近江楽座のプロジェクトは、資金的なサポートに加えて、大学がバックにあることで、地域の人たちの信頼を得ることができるようになったことが大きく、動きやすくなったと思います。近江楽座が立ち上がった頃は、学生たちに自ら行動したいという気持ちが強くあって、それを大学がサポートしてくれるという喜びがあったのではないでしょうか。3年目くらいまではその勢いでやっていましたが、それ以降、中心メンバーだった学生が卒業してしまったり、引き継いだ学生の負担が増したりで、最初のエネルギーがしぼみかけてきたように思うのです。その4年目頃から私が近江楽座に関わりはじめて、実際に苦労したし、他からも聞こえてきたのが、リーダーと他のメンバーのモチベーションの差です。リーダーは先輩から引き継いだ責任感があるけど、他は何となく指示されたら動くといった姿勢のメンバーが多く、息切れしそうな感じをうけました。

私も実際、ひとり年上で、ほかは4回生というチーム構成で活動していたので、スケジュールを組んだり、書類をまとめたりといったマネージメントはすべてやって、指示を出すという感じで進んでいきました。活動は授業ではないので、自分たちで意見の出し合い、考え、行動することによって、盛り上がり、活性化していくはずなのですが、そういう感じではなくなりはじめたのが、4、5年目だったのではないでしょうか。

上川｜ちょうど過渡期というかひとつのターニングポイントになるときに、近江楽座に深く関わったという感じですね。

奥貫｜いまの角さんの話は、とても大事なところですね。最初の3年目と、中間の3年目と、そしてこれからが新しい3年目という風に考えると、楽座の大学における位置づけとか、問題点の整理の仕方が少しずつ変わってきています。これからの楽座をどう運営していったらいいかを考えるうえで、とてもいい話だと思います。

私たち教員が楽座をスタートしたはじめの3年間に、どんなことを議論したか振り返ってみましょう。近江楽座を提案し、運営する際にあたって、まず、学部を超えて、先生たちのコミュニケーションをとる必要がありました。そのために、「大学と地域の連携」というテーマでシンポジウム[注4]を毎年行いました。そのなかで、地域が抱える課題を対象とする教育研究を積極的に展開することによって、特定の専門分野に限ることなく、それを超えた学部横断的な新しい教育の形を見いだせるのではないか、そ

注3)
「信・楽・人」のプロジェクト概要や、活動は本書28ページを参照のこと。

注4)
平成16年より3年間、「地域と大学を考えるシンポジウム」として各年3回ずつ、計9回開催された。ゲストによる講演や、パネルディスカッション、学生によるディスカッション等さまざまな企画が行われた。

して大学と地域の新しい関係をつくりだせないかなどについて熱く議論していましたね。今ならそんなことはあたりまえでしょ？と笑われてしまいますよね。

上川｜その最初の３年間にそういう土壌というか、共通した考え方が出来上がったという感じですか？

奥貫｜そうですね。そうした考え方を持った先生が、近江楽座に関わったことで、お互いの存在を知り、地域に根ざした教育活動を活性化させるエネルギーが倍加した、そういう時期でした。その成果、現代 GP として３年間の文部科学省の補助が終了した時、近江楽座の成果と位置づけが大学事務局として取り上げられ、県大の特色を活かした教育プログラムとして、大学独自の予算で取り組みを継続することが決まりました。それがベースとなって、平成18 年度に再び文部科学省から新たな課題として、「地域再生のための人材創出拠点の形成」というプログラムの募集があった際に、近江楽座から近江環人地域再生学座[注5)]という人材育成プログラムにステップアップし、応募しました。

上川｜近江環人が採択されたのは？

奥貫｜平成 18 年８月、近江楽座がスタートして３年目を迎えたときです。

上川｜楽座と学座が少し重ながらスタートダッシュしたような感じですね。

奥貫｜私たちがそのときにイメージした人材というのは、近江楽座で地域活動を体験し、学んだ学生が、より専門的に地域を理解し、課題解決のために取り組む。そのためにワンステップレベルアップした教育メニューおよび教育方法の開発をイメージして、近江環人のプログラムを作っています。そこはうまくつながっていると思います。

上川｜道筋がうまくついているという感じがしますね。

奥貫｜その一方で、近江楽座の活動を活性化するためには、地域に対して興味を持つ学生の裾野をひろげる必要があることから、人間学の科目の中に、地元学入門という科目を創設しました。オムニバス形式で、近江楽座のプロジェクトを教材化するという授業です。近江楽座に関わった先生と学生が同じ教壇に立って、仲間や後輩の学生に呼びかけるスタイルの授業をつくることで、近江楽座が、一部の特別な学生が取り組んでいるのではないということも示しています。これで、入門編として地元学入門、実践編として近江楽座があって、さらに応用編として近江環人があるということで、地域に学び、地域に貢献する一連の流れが完成したということになりますね。

上川｜人材育成プログラムとしての一貫性ができた感じがしますね。

奥貫｜最初にそこまで考えて楽座をスタートさせたわけではありませんが、水が高いところから低いところに自然と流れていくように、着実に県大の教育プログラムとして定着してきましたね。

その一方で、これからの課題としては、学生も、教員も学部横断的に参加しているとはいいながらも、近江楽座に関わっている先生の数が、あまり増えない。

注 5)
「近江環人地域再生学座」は、湖国近江の風土、歴史、文化を継承し、自然と共生した美しい居住環境、循環型地域社会を形成するために、行政、企業、NPO などそれぞれの立場で地域再生のリーダーとなる資質を有した人材として「コミュニティ・アーキテクト（近江環人）」を育成し、地域のニーズに応えることを目的としている。

角｜しかも、学部や学科が少し偏っている感じがしますね。[注6)]

奥貫｜環境、工学、人間文化、人間看護の４つの学部がある県大の特色を活かして、学生も教員も自由に学びのフィールドを広げてほしいですね。先生が学生に引っ張られるような形でもいいからより多くの先生が楽座、学座に関わってほしいですね。プロジェクトも特定の学部学科の学生たちを中心にどちらかというと閉鎖的になる傾向が少し見受けられる。やはり近江楽座の趣旨からすると、他の分野に対するものの見方や学生の存在についてプロジェクトをとおして身につけて欲しいと思うんですよね。学部学科を超えて横の連携を広げてもらえたら。社会はそういう仕組みのもとに成り立っていますから。

地域と関わって得られること

上川｜先生の方から、学生はもっと広い視野でたくさんの人と関わることが必要であるという話がありましたが、地域に学ぶことで、どんな効果があるか、どんなことが身に付くかということに対してどのように考えますか。

角｜まず、地域の方と学生というのは、年齢も、生活のリズムも職業も違うので、基本的に共通点はほとんどない状態ですよね。そのなかでは、お互いに近づきあわないとどうにもうまくいかないんです。学生の多くが同年代間くらいでしかコミュニケーションをとっていないので、人との関わり方の基本が未熟で、地元の人に文句を言われたり、教えられたりしながら、社会性というものが自然と身に付くと思います。チームリーダーを経験した場合は、そのプロジェクトを進めていくので、段取りとか準備とか意見調整を通して成長しますね。人間学の地元学入門のおかげで、活動を整理し、発表する機会が与えられ、自分たちの活動を客観的に評価する機会を与えられたことも重要です。チームリーダーはすごく大変なんですけれども、得るものは大きいと思いますね。

上川｜お互いに近づき合わないとうまくいかないという話がありましたが、地元の人が学生に近づくというのは、どういう意味があるのでしょうか。

角｜私たちは、頼まれたことを誠心誠意やります。それに対して地元の人は、どうせ学生のやることだからと思いながらも、プロっぽいことが得られるのではないかとすごく期待してしまうというのがあります。でも、実際にやってみると、時間もかかるし、うまくいかないこともあるということが、互いに少しずつわかってくる訳です。また、若い人が地域に来ること自体が珍しく、新たな刺激になって、最初はすごくもてはやされたりもします。そうやって、がんばりすぎて、地域の人が息切れしてしまうこともありますね。

そんな学生の活動を大目に見てもらうというか、長い目で見守ってもらえたらと思います。

上川｜すぐに結果が出なくても、長い目で見てほしいと。地域の人からしたら、若い人を育てるというようなイメージでしょうか。

角｜そう、育てるという視点になってくれるとすごくうまくいくと思います。

上川｜そして、学生は社会に近づく、そういう関係になると、うまくいく。

角｜それぞれの立場から、メリットの共通する範囲が広い程、成功や継続につながると思いますね。

上川｜なるほど、すごくおもしろい関係ですね。先生はその辺はどう考えられますか？

奥貫｜まず、近江楽座のプロジェクトに採択されることは単なる同好会やサークル活動とは異なって、

注6)
平成21年度のプロジェクト指導教員の所属を見てみると、環境科学部7人、工学部３人、人間文化学部14人、人間看護学部２人。それぞれの教員が担当しているプロジェクトの延べ数（1つのプロジェクトに複数の指導教員がつくものもある）を学部ごとに見てみると、環境科学部17、工学部3、人間文化学部20、人間看護学部2、となる。

大学に対して、あるいは地域に対して、活動目的＝事業をきちんとやり遂げるという社会的責任を持つことになります。学生として責任をもってプロジェクトに取り組む、といことはひとつのステータスでもあるし、チームとして乗り越えなくてはならないハードルでもあります。そのハードルを乗り越え、経験を積み重ねることによって、知らず知らずのうちに、社会人や企業人になったときに求められる基本的なスキルが身につくのです。

なかでも、楽座プロジェクトを通して獲得できるものは、コミュニケーション能力だと思います。メンバーの一員として、仲間たちと目的を一つにして、楽しく、元気よくやっていく。初めて入った地域で、見ず知らずの人と一緒にやっていく。自分の側から積極的にアプローチするという意志を持ち、その方法を磨いていかないとコミュニケーションは成立しない。専門教育には、大学として力を入れてきましたが、多様な社会に対応するためには、それだけでは足らない時代となっています。社会とのマッチングという意味で、楽座の活動をとおしてコミュニケーション能力を高めるということは大切ですね。

上川｜そうですね、私も企業で働いた経験がありますが、仕事をするうえでは、まず段取り、そしてコミュニケーションですね。困ったときに助けてくれる人や気にかけてくれる人をつくったりするのも、様々な場面で折衝したりするのにも、すべてコミュニケーション。本当にこの２つが大切だと感じました。社会性をもつ訓練ができているということは、就職においても有利ですよね。

奥貫｜就職活動で自分は、近江楽座という地域活動に関わりリーダーとして活動したという事を、自信を持ってアピールしてほしいですね。

学生は、次のステップへ

奥貫｜楽座の活動を継続するなかから、学生たちの間で、後継者の育成という言葉が使われはじめましたね。これは素晴らしいことだと思います。ふつうだったら、自分の好きなことをやって、後は知らない、となりがちなところですが、活動をしている間に、地域社会に対しての責任感や、プロジェクトを運営してきたことに対しての意義や自覚を、一人一人が感じはじめた結果だと思います。卒業して終わりではいけない、あるいはもったいないと、という想いが、学生たちの中に生まれてきたからこそ、後継者の育成という問題意識が生まれてきた。

後継者不足という課題認識をマイナスでとらえるのではなくて、自分たちの活動を後輩にバトンタッチしていきたい、あるいは地域に対して、責任を果たしていきたいという、そういう意識の現れだととらえていいのではないでしょうか。

角｜そうですね、後継者を育成しようと思う気持ちの原動力はやはり責任感だと思うし、続けなければならない、と強く思うからなのでしょうね。

奥貫｜地域の一人ひとりの顔が浮かんでくるのでしょうね。

角｜仲良くなって、いろんなことを依頼されるようになったり、次はこんなことをしたらおもしろいんじゃないかと学生が提案するようになっていく。そうなると、誰か知り合いを引っ張ってきてでも、活動を継続したくなりますからね。逆にそういうことがないならば、一時の活動で終わってしまうのもやむを得ない。

上川｜そういう意味では、近江楽座のこれまで６年間の成果が確実に根付いているということですよね。

奥貫｜そうですね。私たち教員が教育的見地から後継者育成と言うのなら、当たり前なんだけれども、そうではなくて、活動している学生のほうからその

ことが語られるというのは素晴らしい進歩ではないでしょうか。

上川｜実は成長の過程の中にそういった意識が芽生えているということですね。それは、学生が聞いたらたぶん、うれしいと思います。危惧する気持ちの根底にあることに気づかされた訳ですから。

奥貫｜ものごとはポジティブに考えましょう（笑）。

上川｜それに加えて、人手不足という話もよく聞きます。そういったことも、活動を充実させようと考えるからこそ、もっと参加してほしい、もっと自分たちのことを知ってほしいと思う訳ですよね。もっともっと先をめざしているということは頼もしいですね。求める部分がふえてくる。学生が悩むということはレベルアップの過程だと思える。

奥貫｜そうですね。課題に気づくということは、ステップアップするチャンスだと考えたらよい。

角｜そういうことを、顧問の先生が言ってくれたらいいんですけどね。顧問の先生も、学生を乗せるテクニックを習得してほしいと思いますね（笑）。

奥貫｜学生のモチベーションを高めるためのテクニックというところですね。

角｜はい。地域との関わり方を、少し示唆してあげるとか、問題が起こったときに、一緒に中に入っていくとか。先生自身の経験、体験をとおして助言してもらえれば心強いのですが…

奥貫｜指導する先生によって、学生プロジェクトに関わる姿勢に、それぞれ温度差があるかもしれませんね。根本的な問題解決のためには、学生委員会や専門委員会で課題として取り上げたうえで、組織的な解決を図っていく必要がありますね。

角｜ほんとうに、ほんの少しでいいんです

奥貫｜例えば、学生たちの定例ミーティングに、時間をつくって顔を出してくれたり、プロジェクトの中間発表会や報告会に先生が参加する姿を見るだけで学生にとって大きなやりがいになりますよね。

近江楽座のこれから

上川｜最後に、まとめとして近江楽座のこれからについてお話を伺います。平成22年度で、近江楽座は7年目、最初の3年間は開拓、次の3年間は蓄積、新たな3年間は、近江楽座が大学と地域の連携というなかで、もう一段上の取り組みに進化してく年に差し掛かっているのかなと感じるのですが、近江楽座のこれからについて、ビジョンをお聞かせ願えますでしょうか。

角｜先ほど、後継者という話が出ましたが、私は、活動をしている学生が少なくなってもゼロにならなければいいと考えています。関わっている学生のモチベーションが、途切れることなく続く感じが理想です。先ほど先生がおっしゃったような活動を理解し、評価する言葉が学生に正しく伝われば、モチベーションはかなり上がります。がんばっている学生はその経験が絶対にゼロにはならないので、息切れしないようにそれをつなげていくくらいの気持ちいいのではないかと思うのです。

上川｜印南先生[注7]がおっしゃるような、ゆるやかに

注7)
近江楽座のプログラムにおける、企画・運営、プロジェクトの公募・審査、広報や学外交流などの議案を審議し、事業全般を推進することを目的とした教員による組織、近江楽座専門委員会の委員長。「ゆるやかなつながり」については、本書冒頭の「はじめに」を参照のこと。

つなげて、つづけていくような感じですかね。

角｜そうですね。授業として単位を与えるようになってしまったら、参加人数はふえると思うのですが、モチベーションはまちがいなく、下がってしまうでしょう。それよりは、濃い学生、熱い学生がいるという雰囲気がいいのではないかと思うんです。

奥貫｜近江楽座は、単位を与えるといった小さな教育ではなくて、学生自らが体験をとおして成長するという大きな教育と考えています。大学時代でなければ経験できないことにチャレンジする精神が大事ですね。

そのうえで、学生たちの活動をゆるやかに支援していくという考え方に私も賛成ですが、その一方で、近江楽座の活性化のためには、多くの学生や先生が地域への取り組みに共感して、情報を共有していくことが大切です。近江楽座がこの新しい3年間で目標とする最大の課題は、底辺の拡大です。それによって、立ち上げられるプロジェクトの数やテーマも増えますし、地域活動を次の世代につなげていく可能性も高くなります。

上川｜ゆるやかな枠組みの中で、近江楽座のスタンスに価値を感じて高い意識で関わる学生を増やしていくということですね。

奥貫｜その一方で、大学がいつまで近江楽座をサポートするのか、そういう一見矛盾する問題もあります。近江楽座で実績を重ねて、大学と地域の連携の形として着実に根付いてきた段階で、次のステップとして、自立した地域と大学の新しい関係や組織のありかたといったダイナミックな展開が見えてくるでしょう。

上川｜それが、近江楽座として理想的な活動になるかもしれないですね。

角｜地域の人も、近江楽座も、一様ではないということですよね。濃度の濃いものがあれば薄いものもある、タイプもいろいろあるけど、そういうのをひっくるめて、濃いところとか、相性の合うところが、組んでいく。より多くの選択肢が用意されていくというのは面白い。お互い持ち駒は多い方がいいという感覚ですかね。それはすごく賛成です。

上川｜いろんな可能性が化学反応し合って、関係を築いていくなかから、責任感や一体感が生まれ、活動の次のステップが見えてきたらという感じですね。

大学と地域、次の展開

上川｜さて、だいぶ話も深まってきましたが、その先の新しい展開についていかがですか。

奥貫｜今後の展開ということですが、最初に近江楽座があり、近江環人地域再生学座にステップアップしたと言いましたが、学座を修了し、学長からコミュニティー・アーキテクト（CA）の称号を授与された人材を中心に、CAネットワークというNPO法人を設立する準備をすすめています。CAネットワークが社会的立場で活動を開始すれば、近江楽座で地域へのまなざしを獲得した学生が、近江環人として地域再生のために必要な能力を獲得して、社会のための活動を実践する段階に到達したことになります。そういう枠組みが大学を中心に完成しつつあるということは、近江楽座の今後にとても明るい材料です。この試みに限らず、五環生活[注8)]など、県大発のNPO活動ほか多くの団体やチームが相互に連携しながら大学の外で活動を展開してく、そういうエネルギーが常に蓄えられているという状況がいいですね。それが大学と地域の新しい形を作り上げていく原動力になると思いますね。

上川｜なるほど。そのCAネットや五環生活のようなものがいくつかできていって、学生がそこでいろ

注8)
滋賀県立大学の近藤隆二郎准教授が代表理事をつとめるNPO法人で、五感＋環境＋暮らしをコンセプトとして、環境とのかかわりをもつさまざまなライフスタイルを楽しみ、体験するとともに、社会に定着させていくことをめざしている。大学や近江楽座と関連した事業も多数。

いろなことを教わりながら、スキルなどを互いに高め合えますね。

角｜学生の方も、実際に地域で活躍している人材像が自分の中でイメージできるので、楽座への挑戦の先にあるものを見つけ出せると思います。活動に没頭していると、何が目的でやっているのかわからなくなることも多いですが、目標となるモデルが見えてくると、やりやすい。

奥貫｜100パーセント地域活動を目標とするという訳ではない。卒業生は、行政マンになったり企業人になったり、まず、社会的組織の一員となります。そんななかでこれからは、自分の本務と平行して、地域のために自分の活かせる能力を発揮して、みんなと協働して活動する、そういう時代になっていくのではないでしょうか。一生企業のために尽くすというよりは、組織人としての社会的責任は果たすけれども、自分の人生設計のうえでは地域社会と連携して別の目標を達成するような、ダブルスタンダード、複眼的思想の時代ですね。

上川｜もしそれが実現したらとても豊かなことですね。仕事だけになってしまうと他に目がいかなくなって、狭い世界で追い込まれてしまうことがあるけれども、自分の想いを別のところで達成できるというのは恵まれたことだと思うので、そういう生き方が、これから主流になってほしい。

奥貫｜権限とか責任の所在が徐々に国から地域におりてきている時代ですから、人任せではすまなくなります。地域のことは自分たちがまず、問題意識を持って、解決の方法を考えて、行政や国に働きかけるという流れになります。そんなときに、自分は働いているから、地域のことは関係ありません、ということでは立ち行かなくなる、みんな自分の住んでいる場所がありますからね。企業のために割くエネルギーと、自分の住んでいる地域に割くエネルギーと、適度に配分しながら社会的役割を果たす、そういう気持ちを一人一人が持つことで変わっていくでしょう。すこし先取りしているかもしれませんが、社会の仕組みが大きく変わっていくときに、必要とされるものの見方や方法を、学生時代からすこしずつ学び取っていく、近江楽座はその第一歩という感じですね。

上川｜すばらしいまとめですね。これは、近江楽座のこれからであるとともに、大学、そして社会が目指すべき方向を示しているように思います。

奥貫先生、角さん、今日は貴重なお話をありがとうございました。

4 付録

4-1 プログラム推進メンバー

事業推進代表者		滋賀県立大学学長　曽我直弘
事業推進責任者		近江楽座専門委員会　委員長　印南比呂志
近江楽座専門委員会	**環境科学部**	野間直彦
		近藤隆二郎
		鵜飼修
		錦澤滋雄
		奥貫隆
		松岡拓公雄
		村上修一
		迫田正美
	工学部	徳満勝久
		山根浩二
		河崎澄
	人間文化学部	濱崎一志
		石川慎治
		面矢慎介
		印南比呂志
		森川稔
		山根周
	人間看護学部	本田可奈子
		伊丹君和
近江楽座学生委員会		山形蓮
		御子柴泰子
		中野優
		船田賢
		そのほか、運営に関わったたくさんの学生の皆さん
近江楽座事務局		秦憲志
		篠原尚子
		上川七菜

このほか、近江楽座に関わり支援いただいたすべての方にお礼を申し上げます。

4-2 メディア掲載

	日時	チーム	メディア	見出し
1	H21.5.28	未来看護塾	彦根新聞	市立病院で人形劇
2	H21.6.1	未来看護塾	近江同盟新聞	入院患者ら人形劇楽しむ
3	H21.6.2	未来看護塾	毎日新聞	サンタさんが病院に
4	H21.6.17	あかりんちゅ	讀賣新聞	ともすエコの灯
5	H21.6.26	あかりんちゅ	FM ひこね	低炭素社会と未来の彦根のために
6	H21.7.1	廃棄物バスターズ	かけはし　７月号	「キャンパスは琵琶湖。テキストは人間。」地域密着型を究めることで特異性を放つ。環境と人間がキーワードだ。
7	H21.7.1	廃棄物バスターズ	近江同盟新聞	”廃プラで地産地消”県立大チームが全国でＷ入賞
8	H21.7.15	廃棄物バスターズ	朝日新聞	サイフ Japan で準優勝の快挙
9	H21.7.17	廃棄物バスターズ	読売 TV（ズームイン！！ＳＵＰＥＲ）	ズーミンのお掃除プロジェクトに参加しました
10	H21.8.4	廃棄物バスターズ	かけはし　２月号	廃プラスチックを原料にリサイクルプランターを開発。循環型社会のビジネスモデルを構築する。
11	H21.8.7	廃棄物バスターズ	MOH 通信	地元産の”廃プラ”で故国に花を咲かせましょう！
12	H21.8.8	七曲りでいっちょやったるか！	ＦＭひこね	
13	H21.8.10	七曲りでいっちょやったるか！	ＦＭひこね	
14	H21.8.25	七曲りでいっちょやったるか！	滋賀彦根新聞	「七曲りでいっちょやったるか！」県大生団体、彦根仏壇の紙芝居作る
15	H21.8.28	七曲りでいっちょやったるか！	滋賀彦根新聞の WEB サイト	滋賀県立大生グループ「七曲りでいっちょやったるか！」彦根仏壇の紙芝居作る
16	H21.8.28	とよさらだプロジェクト	中日新聞	県立大生　地産地消を実践
17	H21.9.1	とよさらだプロジェクト	NHK（近江探検隊）	僕らの作ったとよさらだ
18	H21.9.2	とよさらだプロジェクト	中日新聞	地域の支えで地産地消実現
19	H21.9.2	信楽人	のらくら	噂の古民家は信楽焼の新たな情報発信基地。
20	H21.9.22	信楽人	読売新聞滋賀県民情報	民家まるごと白いギャラリーに　県立大学「信・楽・人」＋若手窯元集団「SHIN-RA」
21	H21.9.22	信楽人	CO・OP ステーション	白の世界に包まれた、スタイリッシュなギャラリー
22	H21.9.29	信楽人	LEAF	思い思いに見て、話して、憩う　　たくさんの出合いが待つ白の空間へ
23	H21.10.1	信楽人	オレンジページ	６つの窯元の作品が集まるギャラリー。器はもちろん、床も天井も家電も全て真っ白。
24	H21.10.1	信楽人	hanako	NEW 信楽のターニングショップ。白い足跡を目印にたどり着きたい家。
25	H21.10.10	信楽人	滋賀の ABC	真っ白から始まる信楽の新しい時代。
26	H21.10.14	信楽人	SAVVY	
27	H21.10.15	とよさと快蔵プロジェクト	京都新聞	古民家 憩いの場に 豊郷のプロジェクト ３軒目オープン 高齢者ら 手芸や冠句楽しむ
28	H21.10.16	とよさと快蔵プロジェクト	読売新聞	大学を歩く　滋賀県立大　湖は学び舎　町潤したい　空き家改修　斬新な景観
29	H21.10.21	とよさと快蔵プロジェクト	テレビ大阪（ボランティア２１）	古民家再生でカキネをなくす
30	H21.10.23	とよさと快蔵プロジェクト	e-radio(FM 滋賀)（レディオロコ）	BAR タルタルーガから生放送　活動の紹介イベント告知
31	H21.10.27	とよさと快蔵プロジェクト	NHK 総合	どろんこまつりのおしらせ
32	H21.11.1	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	田んぼでバレー　どろんこ楽し　豊郷で地域交流

33	H21.11.2	とよさと快蔵プロジェクト	京都新聞	住まいのかたち　湖国から　第二部「古民家時代」　若者が新風　地域おこし
34	H21.11.6	とよさと快蔵プロジェクト	GO GUY! 4 月号	発酵グルメが今アツい！　心を醸せ！ソウルフード @SHIGA
35	H21.11.13	菜の花エネルギー	毎日新聞	本番向け準備着々
36	H21.11.26	菜の花エネルギー	毎日新聞	バイオ燃料啓発
37	H21.12.1	FASHION SHOW	滋賀ガイド（インターネット）	第 11 回 朴 ア ー ト 祭 & ホ イ ン ス LIVE - 護 国 神 社 敷 地 内 -
38	H21.12.10	いしアート	京都新聞	『障害者と積み木アート　きょうから石山商店街を舞台に』
39	H21.12.23	いしアート	中日新聞	『商店街アートで活性　「石山アートプロジェクト」始動　大津』
40	H21.12.24	いしアート	朝日新聞	『みんなで作った石山アート　大津』
41	H21.12.24	いしアート	びわこ放送 (きらりん滋賀　５４５)	「石山アートまつり」開催します
42	H21.12.25	いしアート	朝日新聞	『芸術で障害者と交流　「互いに理解、一緒に制作」』
43	H22.1.1	いしアート	京都新聞	『（連載）未来人　障害者と創作　まちに魅力』
44	H22.1.21	ＤＩＧ’Ｓ	朝日新聞（あいあい AI 滋賀）	ヴォーリズ建築勉強し写生
45	H22.2.1	ＤＩＧ’Ｓ	読売新聞	近江八幡・キッズ学芸員になろう！
46	H22.2.11	ＤＩＧ’Ｓ	読売新聞（滋賀県民情報）	市民目線で企画
47	H22.2.24	ＤＩＧ’Ｓ	びわこ放送	ヴォーリズ展
48	H22.2.24	ＤＩＧ’Ｓ	朝日放送	ヴォーリズ展
49	H22.3.5	ＤＩＧ’Ｓ	建設工業新聞	小学生にまちづくり後継者教育
50	H22.3.11	ＤＩＧ’Ｓ	住宅特集	キッズ学芸員になろう！
51	H22.3.12	くつきチーム	日本経済新聞 (夕刊)	らいふプラス「若者は地元で働きたい」
52	H22.3.13	ケンダイ地球座	京都新聞	環境と暮らし、映画で考える滋賀県立大生ら　９日初上映
53	H22.3.13	ケンダイ地球座	中日新聞	原発開発に揺れる島のドキュメンタリー上映　彦根　県立大生が主催
58	H22.3.18	近江楽座売り込み隊	毎日新聞	びわ湖毎日マラソン環境キャンペーン
59	H22.3.26	ＴＴＰ	京都新聞	万の明かりに思い重ね

公立大学法人　滋賀県立大学
スチューデントファーム「近江楽座」
まち・むら・くらしふれあい工舎

2009 年度活動報告書

平成 22 年 6 月発行

発行　公立大学法人　滋賀県立大学
地域づくり教育研究センター
〒 522-8533　滋賀県彦根市八坂町 2500
TEL.0749-28-8612
企画・編集　近江楽座事務局
構成・デザイン　上川七菜（近江楽座事務局）
印刷・製本　近江印刷株式会社
本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製、転載することは禁止されています

最新情報は、近江楽座ホームページ：http://ohmirakuza.netをぜひご覧ください